

第11回 里山シンポジウムin 君津 報告書



里山に託す私たちの未来

2014年テーマ 第11回里山シンポジウムin 君津

里山・裏山・命山 その恵みと創造

～見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ、そして、作る、遊ぶ、学ぶ～

2014年
5/18 日 10時～17時

君津市生涯学習交流センター(君津中央公民館)

資料代500円
苗木無料配布



ケビン・ショート (Kevin Short)
東京情報大学総合情報学科 教授

【プロフィール】
1949年、ニューヨークに生まれる。1971年に来日して以来、日本の「里山文化・自然」に強く惹かれる。上智大学で日本史、日本文学などを学んだ後、アラスカ大学で人類学修士号を取得。1991年にスタンフォード大学で博士号を取得。現在は千葉県印西市に在住。ナチュラリストとして新聞、雑誌にエッセイを寄稿するかたわら、テレビ・ラジオへの出演、自然観察会、講演会などを通して環境教育活動を行っている。
主な著書に『ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記』『ケビンの里山自然観察記』『ケビンの観察記―海辺の仲間たち』等がある。

- 里山活動の事例報告、分科会
- 基調講演
演題 「里山のにぎわいを創りだす力」
講師 ケビン・ショート氏
東京情報大学教授・ナチュラリスト
- 地元発表
- ディスカッション「里山に託す私たちの未来」
コメンテーター 中村俊彦
コーディネーター 新井孝男

テーマ原字：青島良浩 デザイン・イラスト：松本千恵子

主催 里山シンポジウムin君津実行委員会・里山シンポジウム実行委員会
共催 NPO法人ちば里山センター 後援 千葉県・君津市
協力 公益社団法人千葉県緑化推進委員会・NPO法人千葉自然学校

2014年テーマ

里山・裏山・命山 その恵みと創造

～見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ、そして、作る、遊ぶ、学ぶ～

2014年5月18日(日) 場所：君津市生涯学習交流センター(君津中央公民館)

■資料代500円 ■昼食は、各自で準備して下さい。希望者には受付時に食券を販売します。

里

山は、農地、樹林地、水源など多様な自然環境を有する地域であり、永年にわたる人と自然のかかわりを通じて維持・形成され、多種多様な生物の生息・生育環境としても重要な役割をになう場所です。人々は暮らしに身近なその場所を里山・裏山と呼び大切にしてきました。また、そこは経済活動に密着した生業の命山でもありました。

本年は第3次千葉県里山基本計画が発表されます。ここに、第11回里山シンポジウム in 君津を開催し「里山・裏山・命山 その恵みと創造」をテーマに、里山活動の実践を「見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ」、「作る、遊ぶ、学ぶ」をキーワードに、里山の荒廃や有害鳥獣等の身近な問題はもとより、里山に託す私たちの未来「持続可能な自然との共存」について考えます。

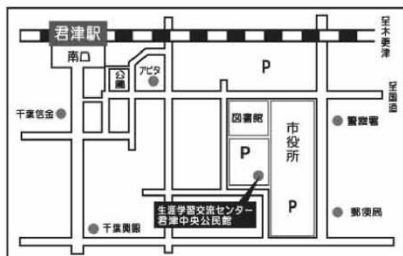


会場アクセス

会場：君津市生涯学習交流センター

君津市久保2-13-2

- JR内房線君津駅南口から徒歩10分
- 館山道君津ICから車で10分



プログラム

- 9:45 開 場
- 10:00 里山活動の事例報告
 - ①君津市内の里山活動団体発表 会場：多目的ホール
みんなで作る里山活動 8団体
 - ②千葉県内の里山活動団体発表 会場：202号
野生動物と里山
 - ③台湾の里山活動紹介と交流 会場：201号
- 11:30 昼休み 昼食は各自でご準備ください。(食券販売あり)
- 12:30 開会行事 会場：多目的ホール
 - 挨拶 鈴木洋邦
 - 君津市長 並木秀幸
 - 里山シンポジウム実行委員会 鈴木宗男
 - 里山シンポジウムin君津実行委員会 千葉県森林課
 - 千葉県第3次里山基本計画について
- 13:00 里山シンポジウム分科会報告
- 13:40 基調講演
 - 演 題「里山のにぎわいを創りだす力」
 - 講 師 ケビン・ショート氏
- 14:40 休憩 一草笛の演奏— ちば里山草笛音楽隊
- 14:50 地元発表
 - ①君津の里山の持つ底力 山のフィールド・ミュージアムの活動から：千葉県立中央博物館
 - ②里山にひびけ子どもたちの声 大鷲の森での子どもたちの交流から：大鷲の森里山ファーム協議会
 - ③都会の人々と交流し里山ににぎわいを 交流・観光と地域づくりから：上総地域の観光活動地域づくり団体
- 15:50 ディスカッション 「里山に託す私たちの未来」
コメンテーター 中村俊彦 コーディネーター 新井孝男
- 16:50 閉会行事
里山宣言(里山シンポジウムin君津実行委員会)
- 17:00 終 了

パネル展示・実演

- ・多様な里山活動団体のパネル展示
15日～18日・・・ギャラリー
- ・実演・頒布等
18日駐車場にて実施(雨天中止)を予定

公式 HP : <http://www.satochiba2.jp/>

● 大会風景 1



目 次

	ページ
● 開催の趣旨や大会プログラム（大会チラシ裏面）	1
● 大会風景 1	
● 目 次	
I 開催あいさつ	5
・ 第 11 回里山シンポジウムの開会に当たって 君津市 副市長 武次治幸	
・ 主催者代表あいさつ 里山シンポジウム実行委員会 代表 並木秀幸	
・ 主催者 in 君津 あいさつ 里山シンポジウム in 君津実行委員会 会長 鈴木宗男	
・ 第 11 回里山シンポジウム開催に寄せて 千葉県中部林業事務所 所長 武井良彦	
II 里山活動の事例報告	
1. みんなで作る里山活動：君津市内の里山活動 8 団体の発表（鈴木宗男）	9
1) ちば千年の森をつくる会	
2) NPO ちば森林資源コンサーブ&サポートクラブこだまの会&房総森輪会	
3) ホタルによる地域おこし「長谷川ホタル谷(やつ)フェスタ」	
4) 森クラブ同好会「ヒメコマツを守り、育てる活動」	
5) 浜子の歴史と景観を守る会	
6) 森と湖の里で活動する「日本一のミツバツツジの里の会」	
7) NPO 法人 久留里城山郷かずさ活性化の会（NPO かずさ）	
8) NPO 法人 久留里フィールドミュージアム	
2. 野生動物と里山（中野まきこ，手塚幸夫）	25
1) 里山の生物多様性の劣化と野生哺乳類：高校生と行った調査・研究から	
2) 電気柵の正しい使用法について：低コスト化と防除効果のアップ	
3. 台湾の里山保全活動紹介と交流（風間俊雄，小西由希子）	27
1) 地質公園與社會工程的實踐—野柳與澎湖的經驗分享	
：ジオパークと社会工学の實踐—野柳と澎湖の例として	
2) 美濃に関する里山の保育事情 -ダム反対運動、エコパークから里山の経営など-	
3) 里山の防災	
4) 台湾の里山事情	

Ⅲ	里山シンポジウム分科会報告（栗原裕治）	35
	1. 早船里山ビオトープ（城西国際大学国武ゼミ学生）	
	2. 亀成川を愛する会（小山尚子）	
	3. 谷当里山計画（斎藤幸一）	
	4. 里山と政策（松阪廣剛）	
	5. 里山と自然エネルギー（桜井 健）	
	6. 里山で旬の山野草を楽しむ会（風間俊雄）	
	7. 三番瀬フィールドミュージアム（佐藤聡子）	
	特別発表 1. 千葉県生物多様性センター（小野知樹）	
	特別発表 2. NPO 法人ちば里山センター（金親博榮）	
Ⅳ	基調講演 「里山の魅力を伝える」	40
	東京情報大学教授 ケビン・ショート	
Ⅴ	地元発表：里山・裏山・命山、その恵みと創造（新井孝男）	49
	1. 房総の山のフィールド・ミュージアム（尾崎煙雄，島立理子）	
	2. 大鷲里山ファーム協議会（石井良幸，白井 博）	
	3. 亀山オータムフェスティバル実行委員会	
	& かずさグリーン・ツーリズム連絡協議会（鵜田英将，豊島太樹）	
	4. ステージ演奏	
	5. パネル展示	
Ⅵ	パネルディスカッション：里山・裏山・命山、その恵みと創造	62
	—里山に託す私たちの未来—（新井孝男）	
	●大会風景 2：みんなの熱弁	
Ⅶ	千葉の里山関係資料	71
	1. コメンテーター資料：里山の重要性と課題，そして再興への方向性（中村俊彦）	
	2. 第3次里山基本計画の概要について（千葉県農林水産部森林課）	
	3. 第3次千葉県里山基本計画	
Ⅷ	「ちば里山宣言 in 君津」の採択	82
Ⅸ	「第11回里山シンポジウム in 君津」から	
	「きみつ里山活動ネットワーク」への進展（尾形孝和）	83
	●「ちば里山宣言 in 君津」	86
	● 編集後記（小倉久子）	87

I 開催あいさつ

第 11 回里山シンポジウムの開会に当たって

君津市 副市長 武次治幸

皆さんこんにちは。君津市副市長の武次でございます。
本来であれば、鈴木洋邦市長が参りまして、ご挨拶すべきところではありますが、急用のため出席できませんので、代わりに一言ご挨拶申し上げます。

本日は、大勢の方々が、この里山シンポジウムにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。第 11 回目となる里山シンポジウムが、この君津市で開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。また、実行委員会の方々におきましては、非常に周到に準備をされて、今日に至ったこと、深く感謝申し上げる次第でございます。そして里山活動に携わっている皆様、いつも本当にありがとうございます。

私が申しあげるまでもなく、里山は命を育み、また環境を整える、私たちにとってなくてはならないものでございます。しかしながら、生活様式が変わったこと、あるいは農業の生産方式が変わったことに困りまして、里山というものは自然に守られるものではなく、私たちが注意して守っていかなければ、里山は維持できないという状況でございます。この里山を未来の子ども達に残していくことが、私たちの責務ではないかと思います。どうか里山に携わっている皆様方、地道で大変な活動ではあるかと思いますが、よろしくお願いしたいと思います。

今日は、午前中から最後まで、非常に盛り沢山の講演等がございます。どうか最後までお聞きいただければ幸いです。最後になりますが、ここにお集まりの皆さんのご健勝とご多幸をご祈念申し上げまして、整いませんが挨拶とさせていただきます。今日は誠にありがとうございます。



主催者代表あいさつ

里山シンポジウム実行委員会 代表 並木秀幸

皆さんこんにちは。本日は、里山シンポジウム in 君津にお越しくださいませ誠にありがとうございます。金親前代表よりバトンを引き継ぎまして、里山シンポジウム実行委員会の代表を務めさせていただいております、並木と申します。



今回は、ここ君津での開催となる、第 11 回目の大会であります。里山シンポジウムは、2003 年に千葉県が全国に先駆けて施行しました「里山条例」の普及を目的として開催されたのが、そもそものスタートです。以来、県内各地で里山に関する様々なテーマの下、シンポジウムを開いてまいりました。

今回の開催に関しましては、この後、アメリカご出身のケビン・ショート先生の基調講演を予定しております。「里山」という言葉を、単に山地のみを指すのではなく、農地や集落、水系なども含めたエリアとしての意味で使い出したのが、このケビン先生です。

そして、今日の午前中には、台湾から来られた研究者の皆さんが発表されていました。この台湾の方々は、千葉の里山を学びたいということで、遥々海を越えて来られております。

何が言いたいかと申しますと、「里山」という言葉が、単に日本の田舎の山地を指す言葉ではなく、今や国際的にも注目を集める言葉になっているということです。「里山」は今後、未来の世代に繋げるべき、新しいライフスタイルやシステムとしての意味を持ったような言葉に成長していくのではないだろうかと感じております。

本日は、皆さんと共に、里山に関して更に学びを深め、何か未来へとつながるヒントのようなものが見つけられればというように思っております。言葉が足りないところでございますが、以上をご挨拶に代えさせていただきます。

主催者 in 君津 あいさつ

里山シンポジウム in 君津実行委員会 会長 鈴木宗男

本日は、君津市では第1回、そして全県下では第11回となる「里山シンポジウム in 君津」に大変お忙しい中お越しいただき、誠にありがとうございます。

君津市は、新日鉄住金（略称）と関連する企業の進出を契機に、それまでの農林・水産業などの一次産業を中心とした地域から大きく変貌し、新しく住宅団地もでき多くの人たちが移り住み、房総半島の南部中核都市として「水と緑の豊かな田園工業都市」となりました。



市内には、九十九谷や鹿野山、三島湖や亀山湖、小櫃川や小糸川に代表される非常に豊かな自然が身近にあり、房総丘陵の自然環境をそのまま生かした県立博物館「房総の山のフィールドミュージアム」が三島小学校の敷地内に開設されています。

現在、君津市では市民の誰もが活用できる市税の1パーセントを活用した文化のまちづくり支援制度がごございます。この制度を鈴木市長さんが推進して下さった結果、市内には多様な里山活動団体が活躍しています。

今回のテーマ「里山、裏山、命山 その恵みと創造」は、次のようなことを意図しております。私たちが里山活動を行っている地域が、農地や樹林地、水源など多様な自然環境を有し永年にわたって維持形成されてきた場所であり、そこは多種多様な生物の生息・生育環境としても重要な場所で、人々の暮らしの身近な場所であること。また、里山の持つ魅力や森林資源としての水、緑、木材や観光等その資源の活用事例は非常に幅広く、里山活動と生業についても考える必要があること等です。

ここ数年、地域によっては過疎化や活動の担い手の高齢化が進んでいます。最近よく言われる里山資本主義の言うところによれば、いろいろな進め方でいろいろな場所で「できる人が、できる時に、できる事を」をキーワードにして里山活動をしていく必要があるのではないかと思います。

本日のシンポジウムでは、各団体から取り組み事例の発表がなされます。その後のパネルディスカッションで参加者全員の多角的な視点で里山活動について話し合いが進められたらと考えています。

君津の担当者として、十分な準備ができませんでしたが、皆さんの熱意に敬意を払うとともに「里山の日」に県下全域から多くの方にお越しいただき、盛況に開催できます事に感謝申し上げます。これからも多様な団体や行政機関とも連携して共に歩んでいきたいと考えています。今後とも一層のご指導ご協力をお願いいたします。

以上、整いませんがご挨拶にかえさせていただきます。誠にありがとうございました。

第 11 回里山シンポジウム開催に寄せて

千葉県中部林業事務所 所長 武井良彦

皆さんこんにちは。里山も田植えが終わりまして、一年で一番瑞々しい時期ではないでしょうか。本日は、第 11 回里山シンポジウムが盛大に開催されますこと、心からお喜び申し上げます。実行委員会の皆様、里山活動の皆様方、日ごろから、草刈りや間伐など、里山の整備に汗を流して取り組んでおられます皆様に深く御礼を申し上げます。また、このシンポジウムの開催にあたり、準備等で色々と努力をされた方々に対して、深く敬意を表する次第でございます。



さて千葉県では、里山条例に基づき、里山基本計画を立てまして、策定に取り組んでおります。平成 17 年に第 1 次の里山基本計画を作成いたしました。この計画では、里山でボランティアをしたいという皆様方と森林所有者の皆様方の結びつきを第一に考えました。いわゆる里山活動協定の促進でございます。その結果、皆様のおかげをもちまして、現在、知事が認定する団体だけでも 84 団体、その活動面積は 170 ヘクタールに達しております。

次に第 2 次計画におきましては、企業の方々にも森林整備に参加していただくということで、里山情報バンクの機能を強化、充実させてまいりました。その結果、現在では多くの企業の方が、社会貢献活動の一環として、里山活動に取り組んでおられます。私どもの管轄内の鹿野山でも多くの企業の方が、取り組んでおられます。

その様な成果を踏まえまして、昨年度、第 3 次の里山基本計画を策定いたしました。新たな計画では、現在認定している活動に加えまして、地域の里山を整備、活用する活動を、広く里山活動と捉えます。市町村と連携して里山活動を支援して参りたいと考えております。また、東日本大震災を契機にいたしまして、防災に役立つ森林の再生、利用につきましても、里山活動の一環に含めまして、間伐等の森林整備に取り組んでいる活動、地域の振興に結びつく里山活動等を支援していくつもりでございます。

里山活動をされている皆さんからは、森林所有者の世代交代や、活動団体の皆様の後継者問題など、活動をしていく上での困難のお話を伺っております。県といたしましては、第 3 次計画に基づき、皆様方を支援していきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

結びに、本日のシンポジウムに因りまして、皆様方の連携が新たに広がっていくこと、そして、ご来場の皆様方のご健勝と里山活動の益々の発展を祈念いたしまして、簡単ではございますが挨拶に代えさせていただきます。

Ⅱ 里山活動の事例報告

1. みんなで作る里山活動ー君津市内の里山活動8団体の発表ー

コーディネーター 鈴木宗男

1) ちば千年の森をつくる会

■発表者 伊藤道男

■主催団体 ちば千年の森をつくる会

■発表内容 豊英島における森づくり活動ー生物多様性保全を目指してー



◆おい立ちとあゆみ

ちば千年の森をつくる会は、君津市^{とよふさ}豊英湖に浮かぶ豊英島をフィールドとして、「生物多様性保全をめざす超長期の森づくり」を実践している団体です。

第54回全国植樹祭の関連行事を契機として2003年4月に発足し、地権者である千葉県と「法人の森協定」を結び、県内各地から参集する会員が、森林整備のみならず、動植物調査、自然観察会、きのこ栽培など、会員の得意分野を活かしてさまざまな活動に取り組んでいます。

◆活動フィールド・・多様な生き物の宝庫

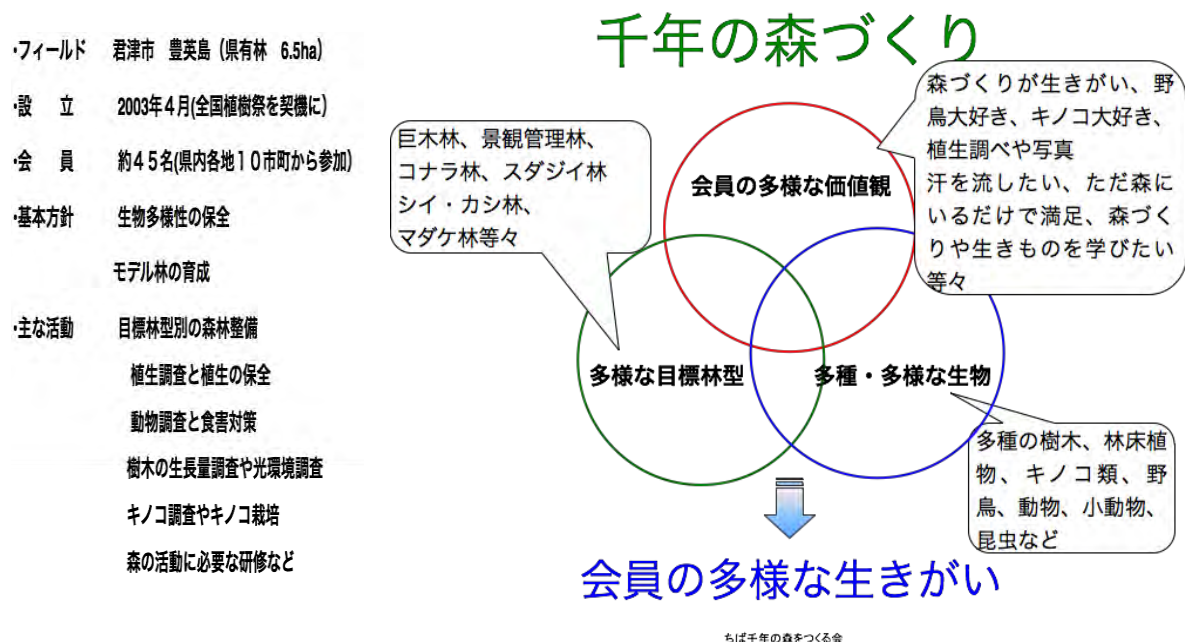
活動フィールドの豊英島は、房総半島中央部に流れる小糸川の源流部、君津市清和の豊英湖中央に位置し、面積は約6ヘクタール、小糸川の浸食によって形成された断崖に囲まれています。1700年代に新田開発を目的とした「川回し」が行われ、更に1969年完成の豊英湖（豊英ダム）の完成により現在のような湖に浮かぶ島となりました。

植生は氷期遺存種のモミ・ツガ林などが残る一方、地域特産のカシ炭生産に由来する二次林など、様々なタイプの森林を見ることができます。島に通じる唯一の吊橋は常時施錠されていることから、会の活動以外の人為的な影響が少なく、高木から灌木まで多様な樹木が混生し、植物、鳥類、昆虫、キノコ類など多様な生き物の宝庫となっています。



◆生物多様性保全をめざす超長期の森づくり・調査や観察を継続—楽しく多彩な活動

活動の基本的スタンスは、植物、動物、野鳥、昆虫、野生キノコなどの生き物調査に加え、シカ生息数や食害調査、光環境調査、広葉樹林成長量調査など各種モニタリングを継続的に実施し、これらのデータを踏まえ「必要に応じて森に手を入れる」手法をとっています。定例活動日は月1回、この他必要に応じて不定期に特別活動日又は臨時活動日を設けています。植物班、野生きのこ班、動物班、野鳥班、昆虫班、栽培きのこ班など班活動も多彩です。



主なモニタリング活動

- 植物調査 現在木本植物178種、草本植物125種、シダ植物48種を確認
- キノコ調査 145種を確認
- 動物調査 ほ乳類7種（センサーカメラにより）を確認
- 野鳥調査 48種を確認
- シカ個体数調査
- 広葉樹林生長量調査 ○ 光環境調査 ○ コナラ林更新調査
- その他 長期継続モニタリング（植物、キノコ、動物、鳥類）、森林整備、ニホンジカによる食害調査と保護対策、ヒメコマツおよびクロムヨウランソの研究保全調査に協力、自然観察会、キノコ観察会（公開行事）、シイタケ・ヒラタケ等の原木栽培、テーブル作りなどの木工・竹工

一度 森においでになりませんか！ 入会大歓迎！

2014. 4. 20 定例活動に集った仲間たち

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2003年4月	43名	毎月1回 臨時活動日あり	君津市豊英 (通称：豊英島)	事務局 伊藤道男 0432-71-0282

2) NPOちば森林資源コンサーブ

& サポートクラブこだまの会 & 房総森輪会

■発表者 岡部正史

■主催団体 NPO 法人ちば森林コンサーブ（鈴木宗男代表）

■発表内容

◆ちば森林コンサーブ設立の目的・・・平成17年11月7日千葉県認証150号

いま、日本の森林が病んでいます。私たちのふるさと千葉県も例外ではありません。その原因は、木材が使われなくなったこと、手入れをする人手がないことなど、林業がなり行かなくなっているからです。NPO法人ちば森林資源コンサーブは、志を同じくする仲間が中心となって、他の多くの方の賛同を得て、お互いの交流の中で学びあい、支えあいながら、ふるさとちばの森林を元気にしていくことを目的としています。

◆事業の概要・・・3本柱 第37回全国育樹祭で国土緑化推進機構理事長賞受賞

森林体験

君津自然観察会
木工教室
竹細工教室
間伐作業体験

間伐品の開発と普及

間伐は元気な森づくりに必要不可欠の作業。間伐材の有効利用。間伐材を使った児童机と椅子のセット商品等の開発

森林整備・手入れの支援

森林の管理や手入れなどのできないでいる山林所有者に代わって作業を代行する

その他 木工・竹工の製造と販売・・・注文にも応じます

ベンチ、プランターボックス、野外テーブル エクステリア整備資材など、多様な製品
・森をきれいに・・・都会からのボランティアによる森の整備



伐採と後片付けで、暗くて人の寄り付かない不気味な森に、明るい日差しが差し込みました。これを間伐と言います。元気な森をつくる上で必要不可欠な作業です。あなたもぜひ参加を！！



明かるくなった杉林

作業後はトン汁でお弁当を
若者からお年寄りまで、男女の
区別なくそれぞれのできる作業
を行います。

・房総森輪会の活動

「次世代に残してあげたい・・・豊かな森を」

マウンテンバイクカーによる森林整備活動は、特に鹿野山古道を整備する活動を進めている NPO ちば森林コンサーブと一体となって活動しています。そこで、マウンテンバイクを趣味としている仲間と荒廃する里山にストップをかけたい、そして森を走る楽しさを伝えて行きたいと思っています。



<活動事例>

- 1 間伐材を利用した古道の補修
- 2 チェンソーや各種（ポータブルエンジンウインチ、ロープワーク）の道具の講習会
- 3 間伐材でログハウス作り
- 4 ツリークライミングやツリーワークの実技研修



私たちは自転車を利用して広範囲にわたって活動できる特性を生かして、特に道の補修から木道の整備を進めています。「人と環境に優しい里山整備」として植物や動物の保護を中心に考えてしまいがちですが、里山に通じる「道」に視点を当てていくことも重要であると考えています。道が荒れると山が荒れる訳です。

「道の無い森の価値は半減する。

道が無ければ保全整備はできない。

安全に通行できなければならない。

そして

私たちにできること...」



サポートクラブ こだまの会は、コンサーブを支援するボランティアの会です。

一緒に森をきれいにしましょう！ 入会大歓迎！ 入会金 1,000 円

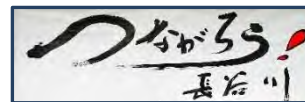
活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2005 年 11 月	会員及び支援 ボランティア 100人	土日を中心に山林 整備、自然観察会、 木工教室など	君津市鹿野山 国有林・学校林	理事長 鈴木宗男 0439-37-3051

3) ホタルによる地域おこし「長谷川^{やつ}ホタル谷フェスタ」

■発表者 渡邊 護

■主催団体 長谷川自治会

■発表内容



◆ “つなごろう長谷川” を合い言葉に「人」「※」「ホタル」の共生をめざす！

本自治会は「つなごろう！長谷川」を合い言葉に掲げ、地域にある諸団体との連携と地域に生きる一人一人の繋がりを重視して活動している。



ホタル事業は、地域内に自然発生するホタルに着目し、身近な地域の良さを見直し、自然財産であるホタルの住む里山環境を地域の繋がりを通して守り、地域の活性化を目指す取り組みとして位置づけている。あわせて、ホタルの飛び交う水田でとれた米は、安全・安心の米として、人・米・ホタルが「共生」

する地域の新たなブランドとしての開発も視野に入れて、今後の長谷川自治会活動について検討している。

◆活動の経過

※ 準備

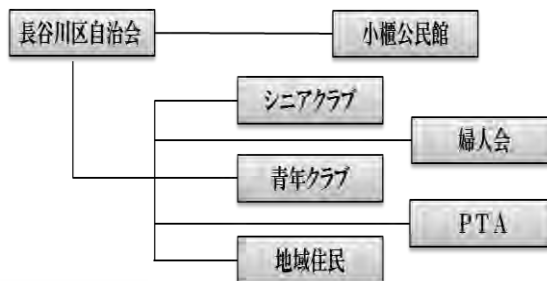
- ① 第1回実行委員会開催
- ② 竹灯籠用の竹の伐り出し
- ③ 竹灯籠・案内看板作り
- ④ 竹灯籠・案内板の設置
- ⑤ プレゼンの用意
- ⑥ 第2回実行委員会

※ 当日

- ① 会場設営・開会
- ② 竹灯籠へロウソク
- ③ ホタルの説明会
- ④ プレゼントの配布
- ⑤ 会場への案内・誘導
- ⑥ 第3回実行委員会（反省会）



地域の連携・協力団体



本地域は久留里線沿線の各地区と同じように高齢化が進んでいる。そこで、ホタルをキーワードの公民館や小学校や地域の団体と連携して企画した本事業は里山活動とは少し趣旨が異なるかと思いますが、地域のにぎわいが里山活動に繋がって行くと思っています。



◆活動の成果

開催された２日間で８０名をこす参加者があった。特に親子連れの参加が多く、子供から老人まで地域の多世代の人々が参加した。長谷川地域から他県や他地域に出られた方、公民館の案内や「ホタル谷フェスタ」看板を見て等、地域あがての宣伝効果により、日頃人の集まることの少ない当地域に、多くの人々が集まったという事実が極めて大きい。

ホタル事業を企画・運営する中で、自治会の中核である班長会が中心となって活動した事の成果。また、婦人会や青年クラブ・シニアクラブ、ＰＴＡ等が活動の中で「つながり」が図られた事も大きかった。更に田畑の耕作者や地権者の協力を得た事は、今後の「ホタル米」販売に繋がる要素である。

当長谷川地域は少子高齢化が加速しており、今回の「ホタル事業」は地域の良さを再発見する機会であったと共に、地域の「つながり」を意識し実践する貴重な場であった。

◆里山活動と地域のにぎわい

＜長谷川地区のホタルの里＞

今回の里山シンポジウム in 君津の別冊にあるように君津の里山のにぎわいとは、「地域のにぎわい」に他ならないと考えている。里山と里（里値）の区別などでなく、最も身近にある空間で「見る・聞く・触れる・味わう・嗅ぐ事を通じて作る・遊ぶ・学ぶ」を意図した活動ができた。これからも地域のコミュニケーションや大切にして継続して行きたい。



＜ホタルの観察会の説明会（公民館）＞



活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2013 年 6 月	シニアクラブ 婦人会 青年クラブ PTA	年間 8 日～10 日	長谷川青年館 北谷、長谷川谷	長谷川自治会長 渡邊 護 0439-35-3586

4) 森クラブ同好会「ヒメコマツを守り、育てる活動」

■発表者 高校生（指導者：渡邊英二）

■主催団体 千葉県立君津青葉高等学校

■発表内容

本校環境系では、毎年、東京大学千葉演習林で1泊2日の実習に行きます。実習では、東京大学千葉演習林内に自生する植物の枝葉を60種採取し、押し葉標本にしています。

実習中、針葉樹の天然林で見慣れないマツの姿を見ました。技術職員の軽込勉さんから、房総半島の丘陵地帯で約1万年前の氷河期から生き延びる稀少植物「ヒメコマツ」であることを教えていただきました。現在ヒメコマツの天然木は、温暖化やマツ材線虫病などの影響で、東大演習林内には11本しかなく、千葉県全体でも君津、鴨川、富津の3市に80本程度が確認されるのみであると聞きました。



林業を学ぶ高校生として「房総丘陵のヒメコマツを後世に残したい」と強く思い、東京大学千葉演習林の協力を受けながら、ヒメコマツを次世代に継承するための保全活動に取り組むことにしました。

◆ヒメコマツの挿し木技術

マツの仲間は一一般的に実生で増殖させますが、ヒメコマツは天然個体の孤立により充実種子が得にくいのが問題となっていると聞きました。

そこで、種子繁殖が困難な状況を打開するために、科学技術が発展している今日においてもすたれるこのない伝統的増殖技術第1弾として「挿し木」に挑戦することになりました。

・発根率を高める工夫①

切り口処理に一般的な「楕円切り返し」に加え楕円部中央に縦に切り込みを入れる「青葉式センター切り」を考案しました。

・発根率を高める工夫②

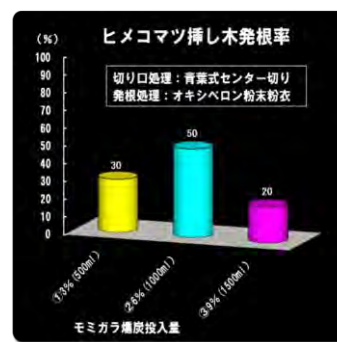
挿し床にモミガラ燻炭を加え、通気性と排水性を高める工夫を施しました。

その結果、挿し木の発根率は「青葉式センター切り、モミガラ燻炭10%投入区」が50%と最も高い値を示しました。



伝統的増殖技術





◆ヒメコマツの接ぎ木技術

伝統的増殖技術第2弾として、「接ぎ木」にも挑戦しています。

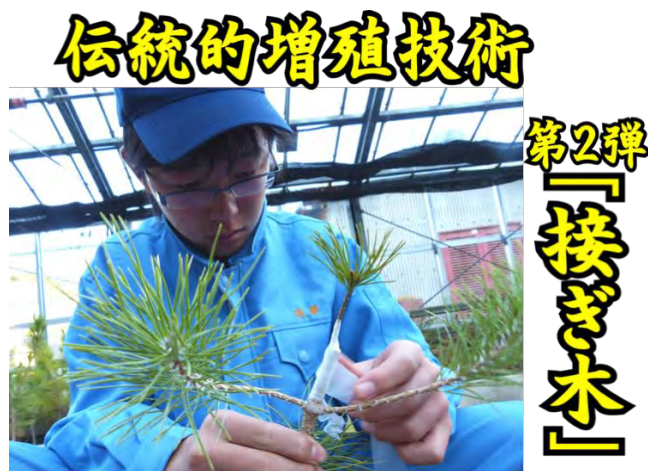
・作業効率を高める工夫

「目玉クリップ」を利用して接ぎ穂と台木を固定する方法を考案しました。そのおかげで形成層のズレはなくなり、作業時間も1分程で済むようになりました。目玉クリップで固定する際のコツは、接ぎ穂と台木の接合部を乾燥から防ぐために、針葉で包み込むことです。

・活着率を高める工夫

活着率を高める工夫として、接ぎ穂の長さは一般的には4～5cmですが、接ぎ穂の長さを通常の半分程度の2cmにした「ショート切り」で実施しました。

その結果、接ぎ木の活着率は、私たちが工夫を凝らした割り接ぎの「青葉式ショート切り、クリップ止め」区が70%と最も高い値を示しました。



◆その他の活動

活動内容はこの他に、愛宕山を中心にした地域の森の森林整備、林床の植生調査、ヒメコマツの後継樹育成、間伐材を利用した木工品の製作、森林環境の大切さを伝える活動に取り組んでいる。



※ この実践が全国野生生物保護実践発表会において林野庁長官賞を受賞しました。

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2010年～	1年生2名 2年生6名 3年生2名	放課後や休日等 を利用して活動	君津青葉高校演習林 愛宕キャンパス	渡邊英二（教員） 0439-27-2351

5) 浜子の歴史と景観を守る会

— 数百年の歴史・文化・里山くらしを見守ってきたカヤの樹を後世につなぐ活動 —

■発 表 者 花島正信

■主 催 団 体 浜子の歴史と景観を守る会

■発表内容

◆はじめに

建暦寺には、その御主木として数百年の間人々の暮らしを見守ってきたカヤの巨木（樹高 13m、幹周り 2.6m）があり、イチヨウの古木と共に、浜子のシンボリックな景観を創り出している。数百年の歴史文化里山の暮らしを見守って来たカヤの樹を後世に継ぐことが重要と考えている。



◆樹勢回復の取り組み

平成7年、立ち枯れ寸前の状態となった カヤの木は、地域の樹木医の熱心な指導と檀家の人々の献身的な努力で樹勢を回復し、元気に後世にその歴史を継ごうとしている。



◆時代を繋ぐ取り組み

檀家十数軒の方に相談し、歴史をつなげる「浜子歴史保存会」を立ち上げ、更に「浜子自治会長OB 会」を中心に「浜子の歴史と景観をも守る会」を立ち上げ地域へ拡大していった。

○浜子山建暦寺歴史保存会(H22年4月)→浜子の歴史と景観を守る会(H22年7月)

地域への拡大 ・建暦寺総代 ・自治会長OB会長 ・浜子自治会長

◆活動の理念

歴史的資産や長い年月育んだ自然の景観は、現代の私たちには創りだす事できない貴重なものであり、この地域の宝物を地域全体で守り、ともに学びながら後世に伝え、歴史を繋いでいく事が「守る会」の役割である。

◆活動内容

- ・「カヤの樹」の保存管理、
- ・建暦寺宝物庫の保存管理、
- ・里山の復元、
- ・炭焼き体験学習、多団体との交流など等。
- ・里山の復元



(浜子古道の復元平成25年12月7日完成小山野の郷へ開通)

- ・炭焼き体験学習は月1 回行い、竹炭、竹酢液は製品化している。



- ・見学会交流会は、佐原、長南たけもりの里、銚子外川の町づくり等と交流した。
- ・浜子自治会行事、浜子子供会行事に支援活動も行っている。
- その他にも多様な活動を展開しています。



◆今後の計画

- ・地域の“宝もの”を見つける

地域の歴史や生活文化を学び価値あるものを

大切に活動

歴史遺産、歴史的建造物、自然。景観・・・里山活動

- ・“宝もの”を守り磨く

地域ぐるみで学びながら育てる機会の創設

地域コミュニティの活性化につなげる活動

保全、啓発、学習、地域力の向上を図る活動

- ・“宝もの”をつなぐ

地域の”核“をつなぐ「巨樹マップ」 他

◆まとめ

景観はみんなのものであり、一朝一夕にはできないものである。自然と人間が入り交じっている現実の様をいう。歴史的な景観の価値で言えば、各時代をつないでいる生き証人とも言える。歴史文化を伝えるもの、地域の宝物、風景の核となるものが景観。

「景観10年」、「風景100年」、「風土1000年」と言われる。周南地区には他にもたくさんの宝物があります。地域を知り地域の宝物を見つけ、宝物を守り、磨く、宝物を繋ぐ事が大切である。街づくりと言うとスケールが大きく感じるが、地域に密着した活動をする、足下からゆっくりやってみることがまちづくりの基本だと考えている。

※建暦寺：行基菩薩開基（鎌倉初期に朝廷から勅許され元号を寺号とした）

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2011 年 3 月	38 名 平均 64.9 歳	第 2・3 日曜日 月 2～3 回	君津市浜子地域	花島 正信 0439-52-6441

6) 森と湖の里で活動する「日本一のミツバツツジの里の会」

■発 表 者 佐野 卓男

■主 催 団 体 君津市ミツバツツジの里事業

■発 表 内 容

君津市の南部に位置し、長らく房総のチベット高原といわれた清和地域。清和県民の森に君津市がつくる日本一のミツバツツジの里事業に賛同し、清和地域の優れた自然環境を慈しみ、ミツバツツジの保護及び増殖を進め、内外の人々に緑と花のある明るい場を提供し地域活性化を進めことを目的に、平成7年から活動始め、8年からミツバツツジの咲く時期に君津市の関係機関の各種植樹事業への参加し、絶えず優れた自然環境に向かいあうことで、感性を養い、仲間と活動を楽しんでいます。



活動内容

- ① ミツバツツジの保護及び増殖に関する調査研究
- ② 君津市「日本一のミツバツツジの里づくり」事業の推進と協力
- ③ ミツバツツジの里山の活用による地域振興に関すること

君津市の花、ミツバツツジを清和県民の森に君津市が平成8・9年に約4万本を植栽した。市内外からボランティアで数百人が森にきて植えたものである。私たち地元でこれに協力し、植えていただいた人々に感謝すると共にその後の成長の様子を見てもらう意味で、毎年ミツバツツジ祭りを、4月下旬～5月上旬に招待して行っています。また、ミツバツツジ、桜、紅葉等を旧道や荒れた土地に植え、草刈りや散水などの管理を16年間継続している小規模なボランティア団体です。ミツバツツジとは、皆様もご承知のように紫色の花を葉が出芽する前に咲かせるツツジで清和地区や上総地区の崖山に紫色でよく目立つ素晴らしい花です。別名を崖ツツジとも言われています。この花を君津市の花に認定した大先輩たちに感謝をしたいものです。





ミツバツツジは大きく分けて2種類あります。東の清澄山系の花が遅咲きのものと西の高宕山系の早咲きのものです。したがって年によって多少の違いはありますが高宕系は3月下旬から咲き出して4月の中旬が盛りとなり、その後、清澄系が5月の上旬まで咲きます。花は10～15日間で散ってしまいますが早咲き、中咲き、晩生咲きと種類があり約1ヶ月以上も美しい

花を觀賞することができます。

君津市では、このミツバツツジを10万本植えて「日本一のミツバツツジの里」を目指しています。ミツバツツジの会は微力ながらそのお手伝いを中心に活動をしています。

今、山間部の多くの農地が耕作放置されています。また、山林も手入れがなされず荒れ放題の場所が目立ってきています。そこに、君津市のミツバツツジや山ツツジ、桜、花梅、花かいどう、紅葉のような花が咲き、長きにわたって大きく成長し、50年後100年後には素晴らしい景勝地が形成され、村おこしに寄与できたら良いと思います



もちろん私たち世代だけでは間に合いませんが、次世代を見通して活動が続けることは楽しくもあり素晴らしいことだと思います。

また、この活動はお金のかからない村おこしとしても、里山の保全や活用に関しても意味ある活動となります。いづれにしても時間をかけて楽しく実行していくことが肝要です。

私たちの活動、又はイベントへの参加は、「下記連絡先」にお問い合わせ下さい。

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
1995年～	40人 30歳～70歳 平均63.5歳	不定期 年15回程度	君津市内	清和自然休養村 管理センター 0439-38-2200

7) NP0 法人 久留里城山郷かずさ活性化の会 (NP0 かずさ)

■発 表 者 末原正彦

■主 催 団 体 NP0 かずさ

■発 表 内 容

地域資源を活用し、周辺地域の活性化と発展に尽力し、併せて魅力ある地域社会の創造に寄与することを目的とする。と定款にうたっており、具体的には、久留里城を南側から見上げる一帯の景色を「城山郷」(じょうざんきょう)と名付け、不耕作の棚田をお借りして、大賀蓮、菖蒲、曼珠沙華等の花や桜、紅葉、ミツバツツジを植え、時期には多くの方々に楽しんでもらっております。他にも「オオムラサキ」「かぶと虫」「ホンモロコ」の養殖にも取り組んでいます。また、この地域の伝統技術で国の民族無形文化財に指定されている「上総掘り」の実習を実施しています。小学生から大学生、一般の方も実習に訪れています。

◆活動事例紹介

・上総掘りについて

「NP0 かずさ」は里山の耕作放棄された田んぼを利用して、自然園(春にはオタマジャクシ・セリ、夏にはホタル・ハスの花、秋にはトンボ・そば、ヒガンバナがあふれる棚田)作りを目指して取り組んでいます。その水源として、この地で発祥した上総掘り技法により自噴井戸を掘っています。



上総掘りとは、細長い鉄管(ホリテッカン: 7 m・20 kg)を竹製のヒゴでつるし、地上から鉄管の自重を利用して地面を突き、直径10 cmの孔を掘り進みます。ヒゴを継ぎ足して行くことで100 mから500 m程度の井戸の掘削ができます。

君津市の地層・地形は砂層・泥層・砂礫層が交互に重なって緩く傾斜した単斜構造をなし、東京湾地下にある水盆に続いています。水を透しやすい砂礫層や砂層は、降水量の多い上総丘陵の森林から雨水の供給をうけて帯水層となり、水を透しにくい泥層に上下を挟まれ傾斜しているので圧力を受けた状態です。その層に孔をあけると水が噴出します(自噴)。

特徴的な技術としては下記があげられます。

- ばねを利用・・・ヒゴの上部を竹のハネギにつなぎ、その弾性でホリテッカンの上げ下げを助ける。
- ネバ水(粘土水)・・・掘削時粘土水を孔に注入して、水圧で孔壁を支え、壁に吸着して土が崩れて来るのを防ぐ。また掘りクズを浮かせて鉄管内に取り込み易くする。
- 掘りクズの処理・・・管を用いてその下部にペッカンと呼ばれる逆止弁を取り付け、管を地面に突く時に、ネバ水で浮かした掘りクズを管内に取り込みます。ある程度掘りクズを取り込んだら、管を地上に引き上げ管の上部の口から吐き出します。
- 竹ヒゴで連結・・・剛体であるので孔底の感触が得られる。さらに柔軟性があるのでヒゴ車で巻きとることができる。
- ヒゴ車・・・人が中に入り体重移動により、てこの原理を利用してヒゴを巻き上げる。

上総掘りで掘られた井戸の水は農業用水、飲み水など生活用水、酒造り、野菜・花卉の水耕栽培、魚の養殖に利用されています。

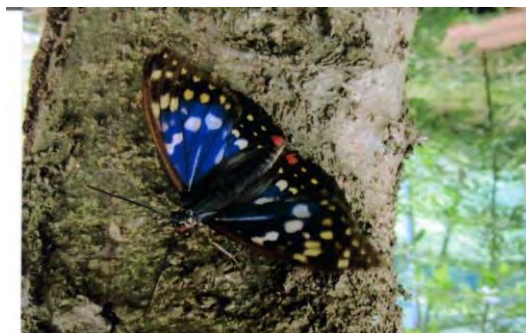
現在では動力によるドリルでの井戸掘削が主流となりましたが、身近な材料による簡単な装置であり、また人力だけによる掘削であることを活かして、発展途上国での井戸掘りや国内では皆で作り上げる絆づくりを兼ねて学校や公園での災害時に備えての井戸づくりに利用されています。

私たちも多くの人に上総掘り技法を知ってもらい活用するのに役立てて頂きたく、見学・体験の受け入れを実施しています。

◆その他の活動時例紹介：各事業と一緒に活動する仲間（メイト）を募集しています。



「大賀蓮」メイト募集



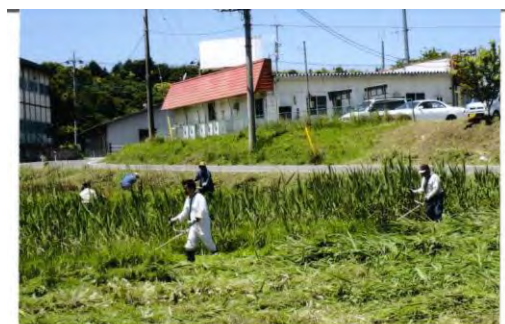
「オオムラサキ」メイト募集



「かぶと虫」メイト募集



「ホンモロコ」メイト募集



※NPO かずさ会員募集
一緒に活動しませんか。

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2001 年～	25 人	月に数回	久留里地区周辺	末原正彦 0439-50-5155

8) NPO 法人 久留里フィールドミュージアム

■発 表 者 坂本好夫

■主 催 団 体 NPO 久留里地区のまちづくり

■発 表 内 容



「久留里現代アート展」
アートイベントにおける里山の活用

当団体は、2006 年に久留里デザインング研究会として発足し「千葉県地域資源を活かしたまちづくり関連施策」に応募し千葉大工学部宮脇研究室の協力を得な

がら地元住民である私たち自身の気づかない「まちなみ建物」「歴史」「自然」等の久留里の魅力を認識する作業から活動を始めました。翌 2007 年には「千葉県地域資源を活用した質の高い地域づくりモデル事業」において、それらの地域資源を活用した集客イベントを開催しました。

現在は、調査と改修を行い国の登録文化財建物に登録した「ギャラリー河内屋」の運営等を活動の中心としています。パブリックエリア内の空き店舗や空き地等を活用しての交流事業を企画し実施しているまちづくりグループです。

今回の里山シンポジウムにおいて発表の機会をいただいた理由は 2010 年と翌 2011 年に開催した「久留里現代アート展」における里山活用の事例が実行委員の興味を惹いたことと理解しています。



「久留里現代アート展」において、私たちが意図したところは普段の生活の身近な所にアート作品を展示して新しい交流の場を出現



させることでした。企画当初は、普段の私たちの主な活動場所の久留里中心部を会場として想定していました。しかし、会場の範囲は里山へと広がっていきました。その理由はかつて学生たちとしたように久留里を参加希望の作家と歩き回ることから作業を始めたことにあります。作家に予め展

示場所を指定するのではなく一緒に歩きその空間に同時に身を置き、場所を決定していきしました。この手法が必然的に我々の生活圏の中で魅力的な空間である里山へと導いていったのだと考えます。

これらの行動は先ず私たちと作家との交流があり、次に展示場所の所有者との間にも交流が生まれます。そしてそれは創る側と見る側へと広がっていきます。また、作家やアートイベントに興味のある人たちの中には特に環境への意識の高い人たちが多くとも感じました。そのような交流から地元が得るものも大変貴重ではないかと考えます。

私たちには身近に里山があり、望めばその環境の中でいつでも活動できる幸せがあります。しかし、強く願わなければ突然奪われてしまうものとしても認識しなければなりません。

◆当会は、平成 18 年に発足

君津市久留里地区内において、地域の資源を活かしたまちづくりを進めようと考え、手始めとして千葉大学工学部宮脇研究室と共に「まちなみ」「歴史」「自然」等、地域の魅力を認識することから活動を開始しました。その後は空き店舗や里山環境を活用した「久留里現代アート展」や「くるり手作り体験館」を開催しました。

◆景観づくり地域活動団体に認定

平成 20 年 11 月 景観づくり地域活動団体の認定を千葉県より受けより良



い景観づくりに向けた活動を行っています。昭和初期の建築物を改修して国の登録文化財建物とし、ギャラリーとして活用しています。また、外部からの依頼を受け建物解説ツアーや周辺自然環境へのご案内も行っています。

現在、君津市は景観行政団体となり景観計画の策定を目指しています。里山活動団体の皆さんとは良好な自然環境を後世に残すため連携を深めていきたいと願っております。

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2006 年～	13 名	不定期	君津市久留里	info@kururi.info

2. 野生動物と里山

コーディネーター 中野まきこ、手塚幸夫

房総半島で増加・分布拡大を続ける野生哺乳類による農作物被害は、ここ数年深刻な状況になってきています。また、千葉県北部でも、印西市・成田市を中心にイノシシの侵入・分布拡大が、東金市や千葉市ではアライグマやキョンなどの侵入・進出が次々と報告されてきています。

この分科会では、「市民（高校生）による哺乳類の分布拡大に関する調査」と、「農作物被害を防ぐための電気柵の概要と使用法」について報告してもらい、野生哺乳類の現状と私たちにできる対策について考えてみました。

1) 里山の生物多様性の劣化と野生哺乳類 ～高校生と行った調査・研究から～ 手塚幸夫（夷隅川自然教室・県立大原高等学校）

千葉県では、イノシシは40年ほど前に一度絶滅していること、キョンは展示施設から逃げ出した個体が野生化したことなど、興味深い情報がいくつもあります。さらに、房総半島の山間部では、過疎化と森林の荒廃・耕作の放棄が進み、野生哺乳類の増加が加速していて、農作物被害が大きな問題になっています。そこで、里山の生物多様性とその変遷を考えるとともに、野生哺乳類の分布拡大とその原因について高校生と一緒に調査しました。

調査は、アンケート調査と現地での爪痕・足跡調査や聞き取り調査、赤外線センサーカメラによる調査などを併用して行いました。

アンケート調査により、17種の哺乳類の情報が得られ、そのうちの5種について分布地図が作成されました。特に、イノシシ、アライグマ、キョンの3種については、詳しいデータ集計と分析を行ないました。そして、この15年程の間に、目撃地点は、イノシシで約1.7倍、アライグマで約2.7倍、キョンで3.4倍に増加していました。分布については、イノシシは、山間部を中心に分布を広げているのに対し、アライグマは、田園地域から市街地で分布を広げていると考えられました。キョンも市街地進出していることが分かりましたが、その分布拡大パターンはアライグマとは異なっていました。

結果の分析から、次のことが考察されました。第一に、耕作放棄地や荒廃した森林・竹林の増加が、イノシシの増加・分布拡大の大きな要因になっていること、アライグマについては、耕作地・森林の荒廃に続いて進む、集落の過疎化、空き家や無人の建造物の増加などが分布の拡大を助けている可能性が考えられました。当初、キョンはイノシシと同様に、森に強い執着を持っていると考えたのですが、調査が進むにつれて、公園・人工緑地などがあれば、市街地に出没してくることが明らかになりました。

また、ミカンやトマトなどの果実だけではなく、花壇の花や庭木などを食べ、時には残飯までも食べるなどの情報が得られ、市街地でも容易に餌を得ることができることも分かってきました。

これらのことから、キョンの個体数増加と分布拡大の速度は、イノシシやアライグマよりも大きく深刻であると考えられました。



キョン

2) 電気柵の正しい使用法について ～低コスト化と防除効果のアップ～

清水 亨 (株式会社サージミヤワキ)

動物を農地から排除する柵は、物理柵と心理柵の2つのタイプに分けられます。

物理柵は、物理的に動物を制御しようとする柵で、有刺鉄線、ネットフェンス、木さくなどがあります。一方、電気柵は心理柵なので、しっかりとショックを与え、柵は怖いと思わせ、その記憶を持続させることが重要です。

電気柵をうまく活用し、きちんと野生動物を排除するためには、いくつかポイントがあるので、それを理解して置くことが必要です。

電気柵は流れる電流ショックで動物を排除するシステムなので、高い電圧＝3000V以上の電圧がかかっていることが大切です。

回路のスイッチとなるのは動物です。すなわち、動物が線（ワイヤー）に触れることで、地面と線を結ぶスイッチが入ることになります。ですから、地面側で言うと、アースがきちんと接続されていることがポイントになります。

フェンスがきちんと見えるようにすることも重要です。最近は赤色・黄色・緑色などいろいろな色のワイヤーがあるようですが、重要なのはワイヤーが動物からよく見えることです。野生哺乳類の多くは基本的に白黒の世界なので、白いワイヤーが適当と思われます。

設置のポイントは次の5つです。

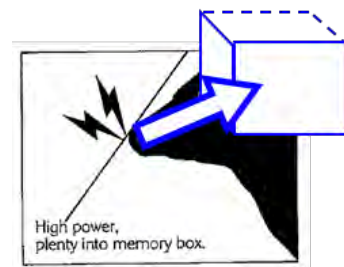
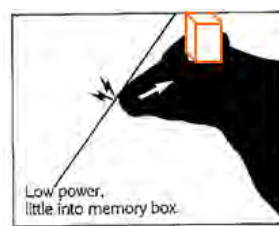
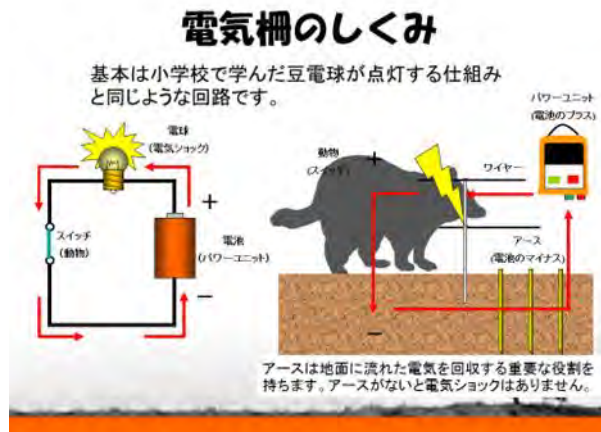
1つ目は架線の高さで、対象とする哺乳類の体高の70%ほどの高さに張ること、下をくぐられないようにくぼみに注意して張ることです。なお、シカは跳び越えるのでそのことも考慮に入れて張ってください。2つ目は、できるだけ直線を多くして張る（コーナー数を減らす）ことです。3つ目は、ワイヤーを支柱に固定しないことです。4つ目は、ライン上は2m幅で草刈りをして漏電を防ぐとともに、ワイヤーがよく見えるようにします。そして5つ目は、十分なアースと確実なワイヤー接続を行うことです。

その他には、電気柵を張る必要がない時期は必ず撤去してください。電気が流れない状態で放置すると、次の年には電気柵の効果が無くなってしまいます。

ワイヤーは、金属と樹脂からできているので、切れたワイヤーをつなぐときは、溶かすなどして樹脂を除去し、金属の接触点を増やすようにしてください。大きなショックは、大きな記憶＝大きな恐怖感を植えつけます。この

ことが分かっているならば、電気柵による動物のコントロールはやり易いのです。

常に、高い電圧を維持すると同時に、仕事量 J (ジュール) = 電圧 × 電流 × 時間を考えるようにしてください。



3. 台湾の里山保全活動紹介と交流

コーディネーター 風間俊雄, 小西由希子

■スタッフ：網代春男, 桜井健, 田原真司, 南川忠男, 水内伸一, 松坂廣剛, 田中正彦

■主催団体：いちほら里山クラブ・NPO法人ちば環境情報センター

■報 告

お隣の国台湾でも日本と同様、若者が働きに出たり農業従事者の高齢化で耕作放棄地が年々増加しているそうです。特に作業のきつい棚田などは深刻です。

日本では消費者のコメ離れが問題になっていますが、台湾では年に3回米づくりができるそうです。米はご飯としてだけでなく、ビーフンや餅など様々な形を変えて



風間俊雄



小西由希子

食卓にのぼります。しかしそれでも食糧需給率は日本と同じ30%程度と聞き驚きました。

すぐ隣の国事情は知っているようでほとんど知られていません。同じような課題を抱えながらも、里山の持つ生物多様性の恵み、すなわち生態系サービスの重要さに気づき、「里山イニシアティブ」を掲げて行動を始めた方々から、台湾の里山事情についてお話をいただきます。

【演題と発表者】

1) 地質公園與社會工程的實踐—野柳與澎湖的經驗分享：

ジオパークと社会工学の实践—野柳と澎湖の例として

蘇 淑娟（国立台湾師範大学地理学科 教授）

2) 美濃に関する里山の保育事情—ダム反対運動、エコパークから里山の経営など—

黄 鴻松（美濃龍肚國小教務主任、八色鳥協會理事長）

3) 里山の防災

陳 雅文（株式会社建設環境研究所 環境防災部）

4) 台湾の里山事情

劉 淑惠（国立高雄師範大学地理学科 副教授）

1) 地質公園與社會工程的社會實踐—野柳與澎湖的經驗分享：

ジオパークと社会工学の実践—野柳と澎湖の例として

蘇 淑娟（國立台灣師範大學 地理學系教授）

台灣的地質公園概念是農委會林務局透過地景調查與保育工作，所發展出來銜接國際環境保育訴求的工作。當代 UNESCO 推動的地質公園可以說是「為人類社會而存在的地球科學」，它促使過去以關懷地景與地形為主的地景保育，轉化並延伸到以社區居民為核心的地景與環境保護，重視社區參與的環境教育、生態旅遊、和永續的在地環境。

以社區參與為主的环境教育、生態旅遊、永續的在地環境與社會經濟，是聯合國教科文組織地質公園的核心價值，但是民眾參與式的社會工程並非傳統台灣社會熟習的環境關懷方式，所以需要一些勇氣、練習、與方法，因此台灣推動六個地質公園，分別是野柳、澎湖、馬祖、（高雄）燕巢、（雲林）草嶺與（台東）利吉國家地質公園，期冀以學者之力輔導社區發展出適合在地的計畫與行動方案。

野柳與澎湖是兩個有差異的地質公園發展形式，各有結構與行動者的優勢與限制。野柳地質公園以其海岸地形與女王頭著稱，主要由觀光局的風景管理處推動，所以社區介入較晚且較少，但是由於接近都會區且交通便捷，所以旅遊者眾，野柳在地感的發展較弱。澎湖地質公園，則是台灣最早由縣政府推動，由於交通運輸的限制，使它保有較多的在地特色與商品特色，對於旅遊者具吸引力。兩個地質公園的差異也表現在載量的問題，野柳地質公園僅有 24 公頃面積，每日遊客可由 7,000 人到 12,000 人不等，年度遊客高達 265 萬人次，而澎湖群島擁有 13,000 公頃，年度遊客卻遠低於一百萬。如此差別說明兩者環境壓力之異，因此「社會參與式」的地質公園發展就有所異。本文最後將以兩個地質公園目前朝向社區參與式的實踐方式，做簡單的比較分析。



蘇 淑娟さんの発表の様子

Geopark Practice and Social Engineering: Experience from Yehliu and Penghu Geoparks

Shew-Jiuan Su

Department of Geography, National Taiwan normal University

Taiwan geopark promotion is initiated by geographers and geomorphologists and supported by the Forestry Bureau, for the need to develop settlements where landscapes are of value. As the goal for the UNESCO in promoting geoparks is to pursuit an “earth science for society”, a humanistic turn is made possible for landscape conservation. Landscape conservation used to be for natural landscape in Taiwan, but with the UNESCO geopark initiatives, landscape conservation is turned to base upon community and its people for sustainable social and environmental development. Thus, local participation becomes important for environmental education, eco-tourism and sustainable local environment.

Local community based is the main character that needs particular social engineering according to UNESCO geopark. The ways and doings of local participation in geoparks are new to Taiwanese society, so some practice and experiment are needed. Taiwan scholars, with the help of the local communities and central government, established framework and accumulated experience for six geoparks so far. They are Yehliu, Penghu, Matsu, Yentsao, Tsaoling and Liji geoparks. Each has distinctive geology and community and local milieu. So the lessons learned from each geopark is different.



Yehliu and Penghu are two distinctively different geoparks, in terms of structural force and agency. Both has its own merits and drawbacks. Yehliu geopark, famous for its sandstone coastal landforms and Queen's head, is mainly administrated by Tourism Bureau of Taiwan central government. Due to its close proximity to Taipei metro area, tourists are packed all the time and thus community involvement is much less. Yehliu's local milieu plays a lesser role in the geopark itself. Penghu geopark, with basal rocks due to its location and transportation constraint, has kept more local characteristics and charms. The numbers of visitors and spatial scopes of the two geoparks are so diverse that they have different experience of local participation. This presentation will discuss some similarity and difference of the two geoparks, and hope to learn from Satoyama practice of socio-ecological production.

台湾ジオパークの推進は、景観に価値のある集落を開発する必要のため、地理学者や地形学者によって開始され、森林局がサポートしている。

ジオパークの推進におけるユネスコのゴールが「社会のための地球科学」を追求することであるので、人道主義的な変化が景観保全を可能にしている。景観保全は、台湾では自然景観のためであったが、ユネスコのジオパークの取り組みで、景観全は、持続可能な社会的、環境的な開発のために共同体とその人々への依存ベースに変化してきている。したがって、住民参加が環境教育、エコツーリズム及び持続可能な地域環境のために重要となっている。

地域社会が基本になることが主な特徴で、それはユネスコジオパークによる、特定の社会工学が必要となる。ジオパークにおける住民参加のやり方や行為は台湾の社会では新しく、いくつかの試みや実験が必要とされている。地域社会や中央政府の助けを借り、枠組みが確立され、経験が蓄積されたのは、台湾ではこれまでに6つのジオパークがあり、それらは野柳、澎湖、馬祖、燕巢、草嶺、利吉ジオパークである。それぞれが特徴的な地質学や地域社会、地域環境を持っているので、各ジオパークから学んだ教訓は異なっている。

野柳と澎湖は、構成力と企画者の観点から、明らかに異なるジオパークである。両方は、それぞれ長所と欠点を有する。その砂岩海岸地形と女王の頭で有名な野柳ジオパークは、主に台湾中央政府の観光局により運営されている。そこは台北メトロエリアのすぐ近くなので観光客はいつも多くいて、地域社会の関与がはるかに小さいからです。野柳の地域環境はジオパークそのものとしての役割は少ない。澎湖ジオパークは、その場所と交通機関の制約のために、基本的により多くの地域の特性や魅力を維持している。2つのジオパークの訪問者の数や景観が多様なので、住民参加の経験も違った形となっている。このプレゼンテーションでは、2つのジオパークの類似性や違いを議論し、社会生態的な生産の場である里山の実践から学ぶことを期待します。

邦訳：南川忠男（NPO 法人ちば環境情報センター）



2) 美濃に関する里山の保育事情—ダム反対運動、エコパークから里山の経営など

黄 鴻松（美濃龍肚國小教務主任・八色鳥協會理事長）

希望の種もみ（原題：希望的種子）

台湾の農村は長年にわたり、都市のために廉価な天然資源（注：農作物や水などを含んだ意味と思われます）と労働力を提供してきました。美濃も例外ではありません。1960年代、高雄に次々と工業団地（注：原文は「加工区」となっており、輸出加工区を意味していると思われます）が誕生し、農村の人口を急速に吸収しました。工業用水を供給するため、政府は1990年代に美濃に大型ダムの建設を計画し、地元住民の強烈な反対を引き起こしました。これを機に、一部の若者が故郷に帰ってNGOを設立し、ふるさとのことを気かけ、地域のコミュニティ作りを始めました。

政府は一貫して農業を軽視してきました。2000年に高速道路10号線が開通すると、美濃への衝撃が加速しました。農地は都会の金持ちが取り引きする商品と化し、大きな別荘が農地の上に出現し、昔ながらの農村風景を破壊しました。高齢化した農民は耕作をやめ、若者の多くは都会の磁力に吸い寄せられていきました。人々は都会の価値観に引きずられ、故郷にあってもまるで『通りすがりの旅人』のようでした（注：美濃の人々が自分の故郷に関心を持っていない、または都会から来た人々が地元コミュニティから浮いている、といったニュアンスかと思います）。

ここで育った子どもたちは、柔軟性を欠いた教育体制の下、自分自身の文化をよく知らず、自分たちの土地と疎遠になっていきました。このような状況に鑑み、私たちはいくつかのカリキュラムを設計しました。子どもたちを教室から飛び出させ、地域のコミュニティに参加してもらい、大地の懐へと帰す。体験型の学習を通じて、（故郷の）土地への愛着を再建し、農村の自信を育み、昔日の故郷の輝きを取り戻すのです。邦訳：田原真司（NPO法人ちば環境情報センター）



原文

台灣的農村長期為都市提供廉價的自然資源與勞力，美濃也不例外，1960年代高雄陸續成立加工區，快速吸走農村的人口；為提供工業用水，1990年代政府計畫在美濃興建大型水庫，引起地方居民的強烈反對，此時，部分的年輕人返鄉組織NPO，關心家鄉，進行社區營造。

政府一直漠視農業，2000年10號高速公路開通，對美濃的衝擊加速。農地變成都會區有錢人交易的商品，大型的別墅群在農地上興起，破壞了原有農村景觀，高齢化的農民無力耕種，多數年輕人受到都市的磁吸效應，價值觀被都市牽著鼻子走，人人彷彿只是家鄉的『過客』。

生長在此的兒童，在僵化的教育體制下，對自己的文化是陌生的，對土地是疏離的。有鑑於此，我們設計了一些課程，讓孩子走出教室，進入社區，重回土地的懷抱，以體驗式的學習，重建對土地的感情，建立農村的自信，找回昔日家鄉的光彩。

3) 里山の防災

陳 雅文（株式会社建設環境研究所 環境防災部）

里山は、山地災害の防止・水源の涵養等の国の根幹的な施策である国土保全を目的とする国家的見地からみて極めて重要である。近年、未曾有の豪雨災害により大規模崩壊や土砂災害等の巨大な自然災害が頻発しており、広範囲にわたり多大な被害をもたらしている。このため、里山は、生活環境や景観の保全・形成とともに、荒廃山地の復旧整備により防災に大きな役割を果たすことから、防災機能の発揮が求められつつある。東日本大震災の教訓を受けて、安全で安心できる地域づくりのために、住民と行政との協働を促進し、日頃から地域に根ざした防災教育を通して、災害を乗り越える地域防災力を継続的に向上させることが重要視すべきであろう。



4) 台湾の里山事情

劉 淑恵（国立高雄師範大学地理学科 副教授）

台湾の里地里山も日本と同じ高齢化、中国製の安い農薬と化学肥料、遺伝子組換え作物、休耕、外来種及び若者の移出などの問題に厳しく面している。しかし、日本よりもっと脅威の話では食糧自給率の激減だけでなく、農村の住民は農地を含む土地の所有権がなくしつつある。政府の政策上で工業団地（主に台商）のために徴収されたり、都会に住んでいる子どもの要請（都会で家の購入など）により農地と田舎の家を売ってしまい、都会に子どもと移住するケースも少なくない。



いったいわれらが存在する意味はどこにあるだろう。ここ最優先の視点としては自然を健康的な享受できる環境を目指す。この目的が達成できるもっとも効率的な手法は政府側にあるだろう。持続可能な環境づくりなら教育にあるだろう。

美濃山下 mi'nung'san'ha'

ギター演奏：黄 鴻松 詞 曲：林 生祥

一山來連一片山
id'san'loi'lien'id'pian'san'
山が一山（ひとやま）、また一山
田坵一坵過一坵
tien'kiu'id'kiu'go id'kiu'
水田一枚また一枚、

美濃山下好山光
mi'nung'san'ha'ho'san'gong'
美濃はまことによい景色
美濃山下好所在
mi'nung'san'ha'ho'so'cai
美濃はまことに良いところ

義民帶領來開庄
ngi min'dai liang'loi'koi'zong'
義民が拓（ひら）き
（*義民：命を犠牲にした祖先のこと）

土地伯公來保佑
tu'ti bag'gung'loi'bo'iu
土地神が守る

祖公辛苦來做田
zu'gung'xin'ku'loi'zo tien'
先祖は苦労し田を起こし

出汗流血無相干
cud'hon liu'hiad'mo'xiong'gon'
汗水たらすも気にもせず

Repeat

美濃山下好地方
mi'nung'san'ha'ho'ti fong'
美濃はまことに良いところ

世世代代愛來傳
sii sii toi toi oi loi'con'
子々孫々伝えよう



4人の発表者：左から黄 鴻松さん、蘇 淑娟さん、劉 淑恵さん、陳 雅文さん

5) 台湾の里山保全活動の補足解説

小西由希子

(1) 大地と文化に深く根をはった高雄市龍小学校の「食農教育」

台湾では、学校給食に関する議論は味の良し悪しや食材の安全性などのレベルにとどまっており、給食をどのように教育に活かしていくかが課題であるといわれている。

高雄市龍肚小学校では、農業体験として、雨の多い秋冬には様々な野菜を栽培しており、給食のおかずとなったり、近所の住民の人気商品である。時には台中や台北まで販売されることもあり、利益は生徒たちの卒業旅行の基金となっている。この成功から、周辺の小学校でもこれに倣い始め、都市部の小学校が活動に参加している。田畑を耕し、作物を植え育てて自分たちで食べるというのが、他にはない美濃の学校給食の一大特色である。

龍肚小学校は創立 93 年で、日本統治時代から先生と生徒と一緒に稲や野菜を育て、農業技術を研究するという伝統があった。だが、1970 年代以降進学が重視されるようになり、美濃でも離農する人が増えて、子どもが田畑へ出る機会も減ってきた。黄鴻松先生は、「子どもは自分たちの育った土地について何も知る機会が得られず、文化の値を失ってしまいます。」という。かつて美濃は農業地帯で、煙草栽培や六堆米倉といわれた時代のことを知らないことに驚き、1995 年、黄鴻松先生が農業体験カリキュラムを再開することにした。

2001 年に校内で小規模な稲作体験を始め、その後も模索しつつ、今では 1467 坪まで広がり、「龍肚米」の年間収穫量は 1500 トンに達し、給食費を節約できるようになった。このままいけば、現在一食 35 元の給食費を 30 元まで下げられる。

2005 年、龍肚小学校では、「食農教育チーム」を設立し、日本の多くの小学校と交流を深めてきた。黄鴻松先生によると、自給自足を目指し、郷土や環境を理解するだけでなく、農業を通して大自然の美と残酷さを知り、食材の良し悪しを判別する力を育み、また食物提供者への感謝の心をもつというものだ。生徒の偏食も大きく改善されたという。

子どもたちは、家でも親と作物について話し合ったり、年配者に無農薬栽培を勧めたりするようになり、親子間の話題が増えた。祖先の知恵を学び、大地と文化に深く根を張った龍肚小学校の食農教育は、彼らの給食を何よりもおいしいご馳走にしている。

「Taiwan Panorama 2013 年 5 月号．高雄龍肚小学校の食農教育．林 欣靜」より抜粋。

(2) ジオパーク

ジオパークとは、地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園。地質遺産だけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む。公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する。博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。これらに加えて防災への取り組みも重視されるようになっている（以上、文部科学省ホームページより）。

すなわち、ジオパークのキーワードは、「住民参加、教育、観光等」であり、里山保全の取り組みとも共通しており、ジオパークの推進に努力されている蘇氏は、日本の里山保全のあり方にそのヒントを見つけないかと考えているようであった。

台湾の里山保全活動紹介と交流



2014年度 里山シンポジウム

2014年5月18日(日)

10時～11時30分

君津市生涯学習交流センター 201号室



劉 淑恵さん

(国立高雄師範大学地理学科 副教授)

台湾でも日本と同様、若者が働きに出たり農業従事者の高齢化で耕作放棄地が年々増加しています。特に作業のきつい棚田などの状況は深刻です。

日本では消費者のコメ離れが問題になっていますが、台湾では米はご飯としてだけでなく、ビーフンや餅など様々に形を変えて食卓にのびります。年に3回米づくりができるそうですが、食糧需給率は日本と同じ30%程度と聞き驚きました。

すぐ隣の国事情は知っているようで、実はほとんど知られていません。同じような課題を抱えながらも、里山の持つ生物多様性からの恵み、すなわち生態系サービスの重要性に気づき、「里山イニシアティブ」を掲げて行動を始めた方々から、台湾の里山事情についてお話しいただきます。



Ⅲ 里山シンポジウム分科会報告

コーディネーター 栗原裕治

里山シンポジウム実行委員会の活動は、年に一度の全体会と有志が自発的に実施する分科会活動が柱です。分科会は、様々なテーマで行われています。

今年は、2014年度は、下記の7つの分科会の発表と2つの団体の特別発表がありました。

最近は、いろいろな活動が、知ってもらふ段階から、より現場での実践段階に移ってきていて、普及啓発的な分科会が少なくなっている気がします。幅広い意見交換の場として、もっと分科会活動が盛んになってもよいのではないのでしょうか。

今回は、特別発表として生物多様性と里山、それぞれ専門の組織である千葉県生物多様性センターとNPO法人ちば里山センターに、日頃の活動を紹介していただきました。

1. 早船里山ビオトープ（発表者：城西国際大学国武ゼミ学生）
 2. 亀成川を愛する会（発表者：亀成川を愛する会 小山尚子）
 3. 谷当里山計画（発表者：NPO法人バランス 21 斎藤幸一）
 4. 里山と政策（発表者：NPO法人ちば環境情報センター 松阪廣剛）
 5. 里山と自然エネルギー（発表者：NPO法人ちば環境情報センター 桜井健）
 6. 里山で旬の山野草を楽しむ会（いちはら里山クラブ 風間俊雄）
 7. 三番瀬フィールドミュージアム（フィールドミュージアム・三番瀬の会 佐藤聡子）
- 特別発表1. 千葉県生物多様性センター（発表者：小野知樹）
- 特別発表2. NPO法人ちば里山センター（発表者：金親博榮）

1. 早船里山ビオトープ

ー城西国際大学とのコラボー

■発表者：城西国際大学国武ゼミ学生

■主催団体：さんむ・アクションミュージアム

Tel：090-2723-1511（木下敬三）

2013年秋季、縁あって当フィールドが大学の環境ゼミのフィールドに設定されました。昨年の発表時より進展しています。人工ビオトープの設置を含め2014年冬季までに生き物・植物調査により、驚くべき結果が出ました。過去3年、自主的な生き物調査（講師依頼）で感じていた奥深さが見えてきました。

この途中経過を、学園祭・エコプロダクツ等で発表、特にエコプロではメダカ・タモロコ等を水槽で展示、数少ない生き物現場で好評でした。また、地元小学生向けに環境教育のイベント開催を始めました。

2015年はニホンアカガエルの卵塊、早春の谷津田観察から開催を計画中です。わがフィールドが自然度の高い地域である事を再認識しました。当ミュージアムと大学と生き物調査や環境教育イベントを通して当フィールドの保全にコラボレーションを、子ども主体の古代米栽培も続けていく予定です。



子ども主体の田起こし



学生による子ども向け観察会

2. 亀成川を愛する会

ー生態系を活かしたまちづくりをー

■発表者：小山尚子

■主催団体：亀成川を愛する会

<http://www.kamenari-love.com/>

Tel : 080-3594-6267

e-mail : kamenari-love@yahoo.co.jp



昨年3月から約半年間実施した署名活動について報告します。satochibaの皆様にはご支援をいただき、たいへん感謝いたします。

当会は印西市を流れる全長7キロの亀成川という生物多様性豊かな川とその流域を守ろうと活動しています。亀成川は源流がすべて千葉ニュータウン事業地です。まだ300ha近く売れ残っている中の21住区と呼ばれる未造成地が生き物のサンクチュアリとなっており、これをまちづくりに活かさないか、里山シンポジウムの分科会としてワークショップをしたり、要望書を出したりしましたが、最後の手段として昨年3月、生態系をまちづくりに活かすための協議会を設置してほしいという要望を掲げ、署名活動に踏み切りました。ちらし8万枚を各戸配布したり、街頭署名活動をしたり、satochibaの皆様を始め、多くの皆様のご協力やマスコミ、インターネットで取り上げられたおかげで、署名は1万筆を超えましたが、千葉県やURからは「事業を継続する」という残念な回答がありました。

当会では、引き続き地道な保全活動と同時進行で都市部の生物多様性を守る活動に取り組んでいきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 谷当里山計画

■発表者：斎藤幸一

■主催団体：NPO法人バランス21

<http://balance21.jimdo.com>

NPO法人バランス21の活動地は千葉市若葉区谷当町にある堂谷津です。

千葉市の保全区域である堂谷津は、埋め立て等の改変を免れ現在も谷津の地形を残しています。そこでは農林業の営みにより、多くの生きものを育む自然環境が長い間維持されてきました。しかし農林業の経営環境が悪化した近年、谷津の田や林は荒廃が進みました。貴重な自然環境も失われつつあります。



この堂谷津を目にした私たちは、ここにかつての自然環境を取り戻したいとの思いを抱き、NPOを設立しました。援農という形で堂谷津の再生に取り組む活動は今年で3年目になります。人材、財政等の活動基盤は万全とは言えませんが、米づくりや斜面林・ため池・観察路の整備、いきもの調査、イベント等を実施してきました。2013年は定例活動日を中心にのべ550名が農作業等に従事し、田植や収穫祭等のイベント参加者はのべ150名に達しました。堂谷津には今でも耕作放棄田が残っていますが、かつての景観や雰囲気も感じられるようになり、作業・イベント参加者は堂谷津の「おいしい空気」を満喫しました。

今後も援農という形で堂谷津の再生を進め、貴重な自然環境・景観の活用に取り組みます。

4. 里山と政策

ー津波が海岸エコトーンに与えた影響と その再生、そして復旧・復興事業ー

■発表者：松阪廣剛

■主催団体：NPO 法人 ちば環境情報センター

Tel:043-223-7807, e-mail hello@ceic.info

防潮林や防潮堤の復旧事業が進められる中、海岸域の生態系の被災や再生の状況調査から見てきたことを、東京情報大学の原慶太郎さんからお話いただいた。

仙台平野はマツ林のほとんどが流されたが、南蒲生のマツ林は列状に残り、ここで津波から生き残った生物の調査が進められている。震災後ハマエンドウやコウボウムギなどが出現し、翌2012年にはマツの実生や幼木が多数確認され、コナラはドングリを結実させた。大きな影響を受けた昆虫も、2012年には植生の回復とともに、草食の昆虫やそれを捕食する昆虫が増えてきたようだ。

一方、防潮堤や防潮林の復旧工事では、植栽したマツがすっかり枯れてしまっている。

復旧事業の全容や再生してきた生きものの実態が明らかになるにつれ、1000年スケールの大津波を乗り越えた生きものが復旧事業で危機にさらされていることが認識され、関係部局への働きかけを始めたということであった。

復旧・復興事業と生きものの保全の問題は大変難しい課題だが、自然の復元力のスピードが私たちの予想をはるかに上回ることを知り、共通認識しておく必要があることが分かった。



再生した生きものを埋め尽くして
進む防潮林の復旧事業 2013. 5. 10



建設が進む防潮堤 2013. 5. 10

5. 里山と自然エネルギー

ー地産千消のエコ新築物語ー

■発表者：桜井 健

■主催団体：NPO 法人 ちば環境情報センター

山武杉の家：山武市は地域資源循環型のまちづくりに取り組んでおり、山武杉の住宅建設に補助を行っている。本件は本年6月に新築された山武市の中村彰宏邸の事例である。重力換気・珪藻土・卵殻壁紙など自然の力を利用している。

地産地消の自然エネルギー：日本以外の先進国では、エネルギー革命後も薪がメジャーな燃料であり続けている。日本の森林率はフィンランド(72.9%)、スウェーデン(68.7)に続き3位(68.5)であるが、薪生産量では17位(0.9 m³/百万人/年)と非常に低い。本件は、ウッドボイラーでの直接燃焼による木質バイオマスエネルギーの有効利用で暖房・給湯をおこなっており、これは、丸太(生木も)(長さ80cmまで可)のまま投入でき、液体の媒体を用いて室内に熱を循環させる仕組みである。近隣に適度に未利用材がある里山ならではのエネルギー活用といえる。

「共同太陽光発電プロジェクト」：疑似私募債を活用した市民出資による太陽光パネルの設置も実現している。※疑似私募債：金銭消費貸借にもとづく民法上の債券。

中村邸で12月に小さなお家のエネルギーカフェ～森とおひさまの恵み～を開催。



山武杉の家とウッドボイラー



6. 里山で旬の山野草を楽しむ会

■発表者：風間俊雄

■主催団体：いちほら里山クラブ

Tel：090-3286-0004

一昨年（第9回 里山シンポジウム in 市原）の開催を機に実施しました（旬の山野草を楽しむ会）も今年で3年目を迎えました。た。その主旨は、人間が里山に手を加えることで素晴らしい豊かな里山が保たれ、そこから生み出された山野草を自ら採取し、その場で料理した旬を味わい、多くの人たちに里山の素晴らしさと恩恵を知ってもらうことです。4月19日（土）私たちの活動場所（古敷谷）を会場にして、多くの一般市民の参加のもと楽しく開催されました。当日は素晴らしい天候にも恵まれ、主催者の挨拶の後、全員で山野草採取が始まりました。今回は参加者全員（スタッフも交え）で採取し、一般参加者ともども料理をすることにしました。日頃の下草刈りの成果か？山野草の数も年々増えているようです。今年、特筆すべきは、当クラブの活動場所（市内5か所）の地権者の皆さんをこの地にご招待したことです。地権者の皆さんは自分の土地のことは関心がありますが、他人の土地がどうなっているのかは無関心です。地権者の一人（お婆さん）も日頃体験したことのない経験に大喜び「昔は野草をこのように料理していたよ・・・」とか、他の地権者の方は「他人の土地を見ることが初めてで、私の土地ももう少し手入れをしよう・・・」と再認識していました。我々の活動は地権者の理解の上に初めて成り立っていることと、お互いの信頼関係が大切であることを改めて感じ取った一日でした。来年も頑張りましょう！！



7. 三番瀬フィールドミュージアム

■発表者：佐藤聡子

■主催団体：フィールドミュージアム・三番瀬の会

Tel 090-1769-9494

【一年の活動】

4月：プランクトンの観察会

5月～6月：潮干狩りシーズン

7月：海浜植物観察会

干潟の生物多様性を学ぶ。子ども達を夢中にさせる干潟の生きものたち。
環境教育の大切な環境です。

8月：縄文時代の暮らしのまねっこ

昭和期の漁師の暮らしを学ぶ。8月11日は、焼け付くような干潟だった。海水に浸かりながら、アサリのちびっこはざくざく採れた。

10月：渡り鳥の季節だ。つぎつぎに渡って来る。干潟には餌を啄む野鳥が沢山観察出来る。

12月：「フィールドミュージアム：5年目の振り返りシンポジウム」を千葉県立中央博物館において開催。



特別発表 1. 千葉県生物多様性センター

■発表者：小野知樹（副主幹）

■連絡先：千葉市中央区青葉町 955-2

千葉県立中央博物館内

<http://www.bdcchiba.jp/>

Tel : 043-265-3601

千葉県生物多様性センターは、生物多様性に関する多様な主体の連携・協働の中核をなす事を目指して、平成20年4月1日に設置されました。当センターでは、千葉県の生物多様性に関する情報を一括管理し、これらの情報をネットワークによって広く提供しています。また、「生命(いのち)のにぎわい調査団」という県民参加型の生物モニタリングを続けています。これは、身近な在来生物、外来生物、分布拡大種、季節報告などを県民に調査してもらうものです（26年3月末現在参加団員数901名、報告件数約30,000件）。

千葉県生物多様性センターでは、生物多様性に関する県民の様々な取組を支えるため、①生物多様性に関する情報の収集・管理、提供・公開、②生物多様性に関する調査研究、③シンクタンク機能、④生物多様性に関する教育普及、⑤生物多様性に関する現場指導等に次の機能を有しています。



特別発表 2. NPO法人 ちば里山センター

■発表者：金親博榮（理事長）

■連絡先：袖ヶ浦市長浦拓2号580-148

<http://www.chiba-satoyama.net>

Tel : 0438-62-8895

千葉県全体の、里山活動を活発なものとするべく、平成15年、他県に先駆けて制定された「千葉県里山条例」を契機に、里山に関する疑問、提言、相談、施策など、あらゆる面についてのワンストップサービスの拠点として組織され、現在では、NPO 法人となり、県民のボランティアによって、運営されています。

現在、会員団体は100を超え、増加しておりますが、10年を経て、今後里山活動を継続・発展させるための課題として、第一世代の高齢化と後継者不足が活動団体へのアンケート結果でも明らかになっています。これら課題への対応として、里山活動に必要な知識と技能を習得する「ボランティア養成コース」と、総合的視点で活動できる人材を育成する「次世代リーダー養成コース」を3ヶ年（2013年～2015年）で県全域を対象に企画し、開催していきます。

各地域で、地元での活動として根付く方々の養成を具体化するものです。

一方、この活動を3ヶ年で終わらせることなく、助成終了後も継続したいとの意見が、行政及び関連機関、活動団体等から寄せられており、地球環境基金からの助成を機に始まった活動の輪が更に広がるよう関係者一同努めていきます。



IV 基調講演

里山の魅力を伝える

東京情報大学教授 ケビン・ショート
(Kevin Short)

1. 里山という言葉

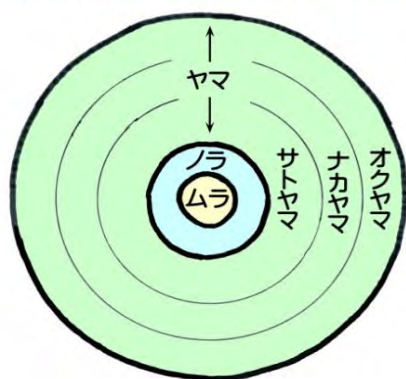
このころ、「里山」という言葉はよく耳にします。昔からあった言葉であるらしいが、一般的に広く使われてきたのは割に最近のことです。ぼく自身が最初に使いだした20数年前当時、殆どの日本人が聞いたことさえありませんでした。ぼくは1987年、千葉県印西町に引っ越して、千葉ニュータウンの周辺の田んぼや雑木林などの生き物の観察を始めました。1995年、この観察の記録を単行本に纏めて出版することになりましたが、本の題に困りました。仮に「A Naturalist in the Japanese Countryside」という英語のサブタイトルを先に作りました。「カントリーサイド」と言えば、英語圏に広く通じる一般的な言葉で、都市環境と手つかずの原生自然の間に広がり、長年にわたって村人たちの暮らしと共に発展してきた文化景観を意味します。しかしこの「カントリーサイド」をどのように日本語に表現すれば良いかに悩んでいました。候補として、「田園風景」や「農村景観」、「田舎」、「田畑」などを検討して、または万葉集の時代から歌によく読まれる「野辺」もいいのかもと考えました。しかしちょうどその頃、「里山」という言葉を初めて耳にして、英語のカントリーサイドにぴったりの意味だと考えました。本の題を「ケビンの里山自然観察記」（講談社 1995年）に決めました。



ぼくは当時想像した「里山」の意味は、英語のカントリーサイドと同じく、農村集落とそれを取り巻く景観の全体でした。つまり、水田、用水路、ため池、井戸、畑、クリ畑、梨畑、雑木林、竹林、植林、茅場、牧草地などなど、人たちの暮らしによって保たれてきた環境の全てが里山の定義の中に含まれていると考えていました。ところが、その後、色々な人たちと話しているうち、「里山」の本来の意味はそうではないということに気が付きました。ぼくにとってちょっとしたショックでしたが、里山は元々、景観の全体ではなく、主に雑木林や竹林、茅場などだけを指して、その定義の中に田んぼやため池などが含まれていません。今でも、里山の定義が定まらず、景観の全体を含む広い意義として捉えている人もいれば、もともとの狭い意義として捉える人もいます。日本の環境省は里山の広い意味を区別するために「里地里山」という新しいコンセプトも創りだしました。

実際に里山を創り出してきた日本の村人の立場から考えれば、もともとの狭い意味の方が適切です。一般的に使われている「ヤマ」という言葉には、普通は田んぼが含まれていません。逆に、田んぼではない、別の空間を指すために「ヤマ」と言います。ぼくの住んでいる印西市の農業者は、「里山」という言葉を使わないが、雑木林や竹林、植林などの空間を普通に「ヤマ」

伝統的な農村型宇宙観



と呼んでいます。里山・中山・奥山を見分けた宇宙観は、農村よりも山村の方に多かったかも知れません。

「広辞苑」やオンライン百科事典「ウィキペディア」は今でも里山を元々の狭い意味で紹介しています。反面、里山に直接関わっている行政機関やNPOグループなどが最近、里山の新しく広い捉え方に傾いてきました。また、保全対策などのスタンスから見れば、里山を一つの纏まった生態系や景観としての捉えた方が適切です。もう、そろそろ、この広い定義に決めて良いではないかと思っています。つまり、里山って、集

落とそれを取りまく田んぼや灌漑施設、各種の畑、各種の森林、草地など、人の手加わることによって保たれてきた環境の全体から形成する地域だと考えればよいでしょう。

2. 里山の価値

里山（広い意味）の景観は世界どこでもの国や地域にはそれなりのものがあります。勿論、その場所の気象や地形などの自然条件、または人々の食生活や好みのライフスタイルによって、景観そのものが大きく異なります。しかし、長年にわたって暮らしの営みによって育まれてきた美しい文化景観であるということはどこでも同じ。そして、どこの人でも、自分の生まれ育ったカントリーサイド景観こそが心の深い所で共鳴を誘います。

普段、ある国や地域の文化を考えると、まずはその美術や文学、音楽、建築などを思い浮かびます。しかし、文化の一番深い所に潜んでいるのは、その地域の里山景観ではないかと思っています。里山景観は人間の暮らしスタイルと自然のコラボレーションから生まれてくる一種の原風景であり、そのイメージが文学から伝承、音楽、美術など、文化のいたるところに無意識的に深く染み込んでいます。例えば、19世紀ヨーロッパの印象派絵画に多く描かれた麦畑やヒマワリ畑や、日本でも人気の高いイギリスのピーター・ラビットも、それぞれのカントリーサイドランドスケープからインスピレーションをゲットしています。ぼくは詩とは縁がまったくありませんが、万葉時代から継がれてきた和歌は、街の周りに広がる里山風景やそこに生活する動植物を詠んでいるものが目立ちます。また、ぼくの変った趣味の一つである手ぬぐいコレクションの中、カエルやトンボ、メダカなど、里山的なモチーフがとっても多い。やっぱり、手ぬぐいも里山も、COOL！

里山景観はもともと、人間が原生林や沼地を切り開いてそのつくり跡地で作り上げたものです。勿論、これは一種の自然破壊でした。しかし、何千年にわたって、多くの動植物が自分の生活スタイルを農業の暮らしのリズムに合わせながら、里山の環境に適応してきました。ですから、原生林とは違うですが、里山景観にはそれならではの生態系が成り立っていて、豊かな生物多様性も育まれています。日本の伝統的な里山は、田んぼや小川、ため池などの水辺環境が、雑木林や竹林などの森林環境と隣り合わせています。この豊かな水辺環境と森林環境の名コンビこそ、多様な生き物にとって暮らしやすい景観を形成してきました。今の日本でも、水生昆虫やカエル、サギ類、ランなどの林床植物など、色々な生き物が里山景観を大きく頼りながら生きています。特に、高い山や原生林の少ない千葉県において、里山景観が生物多様性の

保全に絶対欠かせない環境となっています。人々が持続可能的に暮らし、自然と共に生きる知恵や知識、哲学までが里山景観の中に隠されています。

現在、多くの人たちが自分を取りまく自然や環境、景観から完全に離ればなれになりつつあります。景観から離れるということは、自分の歴史的、文化的ルーツを切断することにも等しく、人々の心理や精神状態を徐々に衰えさせます。現在に見られる多くの社会的、精神的な悩みの原因はここにあると思っています。近くにあり、アクセスしやすい里山景観こそ、失った自然との繋がりを取り戻す場所として最高に違いありません。

日本の里山景観はスピリチュアルなエネルギーにも溢れています。日本人は宗教感が薄いとよく言われますが、これはセム系一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教）のような独断的な教義や教理に依存しないとの意味に過ぎません。実は日本人は豊かなスピリチュアリティをもっています。例えば、収穫や繁盛などの恵みをもたらしてくれる神々、太古から生活の基盤を創ってくれた祖霊、心の悩みを癒してくれる仏などに、いつも祈祷や感謝の素朴な気持ちをこめて拝んでいます（脚注＊参照）。日本では、地域の住民が共有するフォーク・スピリチュアリティが特に豊富で、里山景観のいたるところに表現されています。産土神社、寺院、道祖神や庚申塚、各種の塚、石塔、石仏など、地域の人々が共同で祀っているフォーク・スピリチュアリティ的な聖地が日本のカントリーサイドに溢れています。

食べ物などの供給、地盤や水系の調整、生物多様性の保全、歴史文化の伝承、スピリチュアル的な癒しなど、里山景観が人々に与える恵みは実に様々。このようにわれわれ人たちが自然や景観からもらいうける恵みは専門家によって「生態系サービス」と言います。里山景観の生態系サービスは GREAT!!!

◆脚注＊：このような心がけや思想を英語でスピリチュアリティやスピリチュアルと言って、組織宗教とは区別します。英和辞典で「精神性」「靈性」、「崇高」などに訳しますが、最近、英語の言葉そのものを使う場合が増えてきています。

◆KEY WORDS

文化景観 (Cultural landscape) , 里山景観 (Countryside Landscape),
生物多様性 (Biodiversity) , 持続可能な暮らし (Sustainable Lifestyles)
フォーク・スピリチュアリティ (Folk Spirituality),
生態系サービス (Ecosystem Services)

◆ケビン・ショート (Kevin Short) さんのプロフィール歴

1949 年、ニューヨーク生まれ。日本の田舎の「里山自然」に惹かれ、1987 年より千葉県印西市に在住。1991 年にスタンフォード大学の文化人類学生態学専攻で博士号を取得。現在は東京情報大学環境情報学科の教授として活躍するかたわら、ナチュラリストとして新聞・雑誌への寄稿や講演活動を行っている。主な著書に『ケビンの里山自然観察記』、『ケビンの観察記－海辺の仲間たち』等がある。

講演記録

東京情報大学のケビンです。今日は、ぼくの心の中の「里山」というのがどういう場所なのかを、お話しさせていただきます。

<1>

ぼくの元々の専門は生物学や生態学ではなくて、文化人類学、すなわち、人々の暮らしと自然との関わりを研究することです。

日本に来てまず研究テーマとしたのは「第一種共同漁業権」（註：藻類、貝類など定着性水産動植物を対象として、一定地区の漁民が一定の漁場を共同に利用して漁業を営む権利、Wikipedia より）のこと。

<1>



<2>

その後、25、6年前に印西市の千葉ニュータウンに引っ越したことで、初めて里山とめぐり会った。駅から徒歩5分のマンションで、便利さと豊かな自然が手元にある。これこそ「豊か」ということだと思った。

これは千葉県全体に言えることだと思う。しばらくは三番瀬・谷津干潟の保護に関わっていた。海辺の危機の時代だった。まだ里山は研究フィールドとは見ていなかった。

<2>



<3>

農業は自然を改変してしまう。でも、農村環境の中に思っていた以上に生きものがいる！

生物多様性が高い。
農民と野生動物との関わりは思っていた以上に大きいことがわかった。
田んぼというのは「湿地」。トラクターが掘り起こすカエルを取りが食べる。歩いて、または自転車で回っていると生きものを見つける。
農民とも話す。こういうコラボから農村景観の素晴らしさがわかってきた。（一昨日撮った）

<3>



<4>

まだ「里山」という言葉は知られていなくて、
里山の貴重さを訴えてもだめだった。

あまりにもありふれていたから。そこで、1995年に
「ケビンの里山自然観察記

A Naturalist in the Japanese Countryside」

という本を出した。

「Countryside」という言葉を日本語でどう言うか？

野辺？ 田舎？ 違う。 里山！！

編集者からは「そんな言葉はない」と言われたが、
本を出したらよく売れた。10年間で1万部！

<4>



<5, 6>

テレビ朝日の「久米宏ニュースステーション」に
1年間に5回（各5分くらい）出演して、千葉県の
里山を紹介した。

1回目にTVで広辞苑を広げ、「里山」という言葉を
紹介した。

ぼくは、里山とは「持続可能な暮らしのある農村風景」
と思っていたが、広辞苑に書いてあったのは、
「持続可能的に維持管理される森林や草原のこと」
だった。

<5>



<6>



ここで、ぼくが大好きな児童文学作家である椋鳩十
（むく はとじゅう）という人の「山の民とイノシシ」
という話を紹介します。椋鳩十は、元々は生物の専門
家ではないが、狩人たちと一緒に生活し、その人の目
を通して動物を見ている。人と動物の関わりが良く分
かる話だ。

『イノシシは、元々、人間たちのものではなかったのです。山の神さまのものなのです。だから狩人たちは、イノシシをとることが商売ではあるか、ほんとは、かつてにとるのではなく、神さまから、もらいうけているだけなので、次のような意味のじゅもんを唱えるのだそうです。<もらいうけるについては、あまり、山をあらさず、奥山にも、中山にも、里にも、たくさんのイノシシを残し、何万頭にも、ふやしてさしあげます。だから、ほんの少しばかりでよろしゅうございますから、どうぞ、どうぞ、イノシシをわけてくださいまし。>』

生きものを殺せば魂が怒る。それを鎮めるために「呪文」を唱える。呪文というのは宇宙観だ。

<7>

里山の使い方は、いろいろ。「伝統的な農村型宇宙観」というものを考えてみる。ムラを中心として、その周りにノラ、サトヤマ、ナカヤマ、オクヤマが広がっていく。
谷津田も入る。

<7>



<8>

里山的景観は日本だけでない。国ごとにその国の「里山的景観」がある。自然に人間が働きかけてできるもの、これが景観である。
文化の奥にある（Base）は里山景観。景観の上に文化が成り立っている。
ぼくは世界を回ってみて、そう思った。
イギリスの牧草地と森林、牧草地、Hedge（生垣）、
・・・Peter Rabbit の世界。
「〇〇が一番」ではなく、自分の育ったところが世界一。

<8>



<9>

北欧エストニアの写真。左は牧草地。倉庫の煙突のてっぺんにヨーロッパコウノトリが巣を作っている。コウノトリはトラクターとトラックのエンジン音を聞き分けるといふ。日本と同じように、トラクターの音がするとコウノトリがやってくる。トラクターが通った後は、カエルなどのエサが出てくるから。

風景は異なっても、人と生きものの関わりは日本と同じ。

<9>



<10>

印象派の絵画は里山景観をモチーフにしている。印象派の人たちは、実際にある風景を描いている。里山景観が多く描かれている。麦畑、・・・

<10>



<11>

秋田県象潟（きさかた）の松林と水田。水辺（水田）と森がセットになっている。日本には草原環境が少ない。だから、サギ（水田にいる）が多く、猛禽類が少ない。猛禽類は草地にいるウサギやネズミを食べるから。
この場所は、松尾芭蕉が来て、気に入った。

<11>

秋田県象潟の松林と水田 Paddies and Pinewoods



<12>

千葉県の里山はモザイク状になっている。いろいろな要素（集落、林、水田、畑など）が絡み合っている。台地（北総台地）もある。同じ林でも、栗林、雑木林、竹林など、いろいろな種類がある。

日本の農家は1軒で田んぼも畑も林も、（少しずつ）持っている。だからモザイクになる。日本では実際に耕作する人でないと農地を持つことができないので、営農規模が小さい。

これに対して、アメリカは農業企業だ。農家ではない。広い農地、道、スーパーまで大規模で、棲み分けている。

<12>

里山モザイク



<13>

里山の知恵の一番良い例が、萌芽更新。日本の里山の木（雑木）は萌芽更新（木の切り株から新しい芽が出て、新しい幹になる）がされていた。持続的な木の利用方法。

若い木の幹の成長が速い部分を使い、1本の木を1000年もの長期間使い続けることができる。

<13>



oak
coppice
コナラの
萌芽更新

<14~21>

スライドショー。茶畑。竹林。植林された林。屋敷林。栗畑。牧草地（阿蘇）。そば畑（長野県飯綱）。ラッカセイ畑（千葉県）のボッチ。

<14>

Tea Orchard



茶
畑

<15>

Bamboo Grove

竹林



<16>

Forestry Plantation

林業の植林



<17>

Farmstead Grove

屋敷林



<18>

Chestnut Orchard

栗畑



<19>

Pastureland

牧草地



<20>

長野県のそば畑(飯綱山)

Buckwheat Fields



<21>

Peanut Field

ラッカセイ畑



<22>

Vegetable Field

畑



<22>

大根を干している畑。昔は 100 種類以上の大根が植えられていたが、今は全国でほとんど同じ種類になってしまった。

<23>

萱場。これはススキではなくてオギ。

ずっと長い間、英字新聞でコラムを担当している。よく書くことがなくならないか、と聞かれるが、全然そういうことはない。

<23>

Thatch Grassfield

萱場



<24> 水路。メダカの学校と、<25> ため池
違う形の水辺にそれぞれ違う生きものが生きている。

<24>



<25>



<26>

「里沼」や「里海」という言葉があってもいい。
第一種共同漁業権。地先の漁業。シギやチドリの
中継地としても重要。渡り鳥たちが飛びながら
下を見ると、一面に水面が広がっている湿地（水田）
が見えるので、降りて、エサを食べる。

ここでたくさん食べて、また渡り続ける。だから、
日本の湿地がないと、渡り鳥たちは渡りができ
なくなってしまう。シギ・チの中継地としても重要。
日本の里山は、世界的な役割を持っています。

<26>



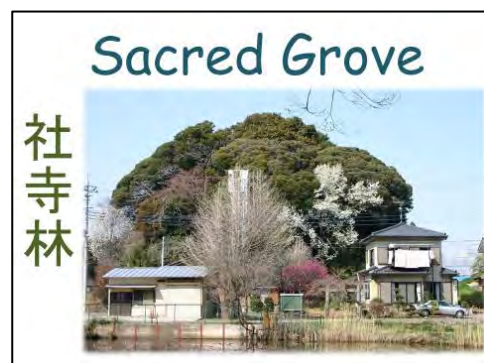
<27>

里山は物質的なものだけではない。精神的にも重要。
社寺林。日本人にとってスピリチュアル（精神的な、
神聖な）な要素が重要です。

『イノシシはもともと人間のものではなかったの
です。・・・』

残しながらとる⇒山の神からいただく。自然の恩
恵を受けて生きる。恵みをいただく。など。素朴な
やさしさ。これは宗教ではない。里山景観の大きな
特色であると考えます。

<27>



ご清聴ありがとうございました。

（記録：小倉久子）

V 地元発表

里山・裏山・命山、その恵みと創造

コーディネーター 新井孝男

新井孝男

ただいま紹介いただきました新井孝男です。ちば千年の森の一員として森に親しみつつ、現在、ちば里山センターの理事として活動しております。(ここで、簡単なリラックス運動を行う)

御手許の資料の表紙をご覧ください。その裏面にございますプログラムのうち、地元発表並びにディスカッションのコーディネイトを担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムのテーマは、「里山、裏山、命山その恵みと創造—里山に託す私たちの未来を」をメインとし、その中で4つの論点を中心に話し合いを進めていきます。

- ①里山の持つ魅力を再認識し、里山の持つ底力を
 - ②里山の現状と課題を考え、再び人々の生活に生かすために、今何が必要なのか、
 - ③そして私たちは自らの活動と「里山」あるいは里山活動のつながりを考え、今何に取り組むことができるのか、
 - ④交流と連携により、「里山に託す私たちの未来を」共有しようとする活動の推進です。
- 以上を踏まえて、地元君津から3つの発表を準備いただきました。

地元発表は、第一番に君津の里山の持つ底力、次に里山に響け子どもたちの声、三番目に都会の人々と交流し里山ににぎわいを、をテーマに実践発表をいただきます。

それでは最初に、里山の底力・山のフィールド・ミュージアムの活動からと題して千葉県立中央博物館から発表頂きます。なお、配布資料では島立さんとなっておりますが、前半を尾崎煙雄さん、実際活動を島立理子さんに、ご発表をいただきます。

尾崎煙雄

私からは、「房総の山のフィールド・ミュージアム」の概要を報告します。中央博物館では十数年前から、君津市及び君津市教育委員会のご協力を得てフィールド・ミュージアム展開しており、その立ち上げから関わってまいりました一人です。フィールド・ミュージアムという言葉は聞きなれない言葉かもしれませんが、私どもは、博物館活動の本来的活動だとの認識を深めつつ、活動してきました。(以下、報告書に記載)

島立理子

県立中央博物館の学芸員として、民俗を専門として活動してまいりました。そして、君津を中心とした地域を舞台にした「房総の山のフィールド・ミュージアム」の活動に、今大いなる可能性と新たな発見、とりわけ、今話題となっている「里山」の持つ奥深さに、魅せられています。

御手許の資料に基づきながら「おばあちゃんの畑プロジェクト」を中心に、発表いたします。

(以上、二人の発表内容は本報告書 51 ページに記載)

新井

ありがとうございました。地元の人々との交流で、博物館活動が限りなく広がり深まる中で、里山の持つ魅力についての認識が深まっていく様子がよくわかりました。

次に大鷲里山ファーム協議会の白井博さん、発表をお願いいたします。

白井 博

大鷲の森は、もともとは大鷲集落の裏山だったところを大企業が買収し、長らく未使用になっていた土地を、農業法人・千葉農産というところが最近取得し、これを地域の再生に活用できないかというところから始まりました。大鷲里山ファーム協議会が先ず立ち上がりました。館山道のすぐ脇、都市部至近の地に約 100 ha に及ぶ広大な山林と農地が広がる、正に里山の典型です。その周りの地元農家を中心に一般社団法人 房総農芸塾を設立し、里山の多面的な機能を活用し、農業体験を通した教育活動で大鷲里山で展開しようと、両者が協力して展開しているのが、里山活動「大鷲の森」です。その中心活動の一つ、東京都渋谷区にある「翔和学園」のこどもたちとの交流を、DVD映像でご覧ください。（DVD上映・発表内容は、本報告書 54 ページに記載）

新井

里山を舞台にこどもたちが楽しんでいる姿がとてもほほえましく印象的でした。又地元の人たちの受け入れ態勢やこの活動にける思いが伝わってきました。ありがとうございました。

次に、オータムフェスティバル実行委員会の鵜田英将さん、かずさグリーン・ツーリズム協議会の豊島さんの若いコンビから発表頂きます。

鵜 田

亀山は父の時代には、数百人の小学生であふれ、にぎわっておりました。しかし、私たちの世代は一クラスも少人数、そして、私のこどもたちは、一クラスの編成も難しいほどの少人数になっています。正に世代ごとに三ケタ、二ケタ、一ケタというぐらいの激減です。その中で、亀山で生きていくことを決めて、今、家業に頑張っています。それではオータムフェスティバルの活動を中心に発表します。

（発表内容は、本報告書 57 ページに記載）

豊 島

私は、亀山の出身ではありません。各地で温泉や地域再生の活動にかかわり、現在グリーン・ツーリズムによる都市と農漁村の交流をめざして活動しており、里山の魅力とその活動に惹かれるようになりました。その立場から、亀山において仲間たち展開している活動を、その背景を含めて報告いたします。

新井 みなさん、この二人の若者の顔をご覧ください。ここで生きていくという覚悟の表れた素敵な



発表に聞き入る参加者

面立ちではありませんか。君津の里山とりわけ亀山の魅力を生かし、都会の人々を呼び込み交流し、里山の魅力を里山産業に発展させようとする若い息吹が感じられ、思わず応援のエールを送りたくくなりました。（会場割れんばかりの拍手）

3組5人の皆様、生き生きとした発表ありがとうございました。会場の皆様も、君津の里山の持つ魅力を再発見されたのではないのでしょうか。又その里山に働きかけ、未来に生かそうとする活動に大きな可能性を感じとられたものと存じます。

以上で、地元発表を終了します。

1. 房総の山のフィールド・ミュージアム

■発 表 者 尾崎煙雄，島立理子

■主 催 団 体 千葉県立中央博物館 房総の山フィールド・ミュージアム

■発表内容



房総半島の南半分は房総丘陵と呼ばれる山地です。最高峰でも標高 408m という低山地ですが、幾筋もの河川が削りだした急峻で複雑な地形が特徴です。また、林地面積の少ない千葉県においては貴重な森林地帯でもあります。この房総丘陵を舞台として展開しているのが千葉県立中央博物館の「房総の山の フィールド・ミュージアム事業」です。これは現地にある山の自然や文化そのものを「資料」と考える「建物のない博物館活動」で、平成 15 年度に開始しました。フィールド・ミュージアムの活動内容は多岐にわたりますが、ここではその中から「三島小教室博物館」、「山みち展示」、「山の学校」、「おばあちゃんの畑」について紹介します。

・三島小教室博物館

房総丘陵の山奥にある君津市立三島小学校は小さな学校で、交通は不便ですが、山の自然に囲まれた素晴らしい場所にあります。君津市教育委員会のご協力を得て、この学校の古い木造校舎の一室をお借りしてできたのが三島小教室博物館です。博物館といってもこの部屋には立派な展示物はありません。机の上には、ケモノの骨、ヘビの抜け殻、ハチの巣、化石などが雑



然と並んでいて、どれも手にとってじっくり見ることができます。作業机の上には作りかけの昆虫標本、書棚には100冊以上の図鑑類、低湿庫には植物や昆虫の標本が収まっています。



毎週金曜日、我々学芸員はこの部屋を拠点として房総丘陵の自然や関する資料の収集と研究を行っています。千葉市にある本館から車で 90 分ほど離れたこの場所は、房総丘陵を研究するための前線基地ということもできます。

・自然観察路「山みち展示」

山の自然そのものを「展示物」と考えたのがこの自然観察路「山みち展示」です。

清和県民の森の遊歩道に沿って、季節の自然などの解説板を設置し、季節毎の案内地図を配布して、訪れた方に自由に見学していただくようになっています。鹿野山で活動する NPO こだまの会も、この山みち展示方式を展開しています。



・観察会「山の学校」

山の自然や文化をテーマとして、房総丘陵のおすすめの場所を学芸員が案内する観察会を年に 10 回以上実施しています。中でも「山の学校」という定例観察会は 4～9 月の毎月第 3 土曜日に清和県民の森や君津市立三島小学校の周辺で開催しています。他にも、地層、化石、昆虫、泥たんごなど様々なテーマの観察会があります。



・おばあちゃんの畑プロジェクト

このプロジェクトは「タネ」から始まりました。近年、農作物の種子は種苗会社の製品を購入するのが普通で、全国どこでも同じ作物が育てられるようになっています。しかし、以前は作物の種子は農家が自分で採るのが当たり前でした。これを自家採種といいます。自家採種が繰り返されると、作物はだんだんと用途やその地域の風土に適したものに変わります。これを「在来作物」といい、かつては地域ごとに独自の在来作物が育てられていました。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトは、地域に残る在来作物の種子を集め、機械化される以前の方法で栽培・加工し、その技術を記録・継承するという試みで、平成 20 年に開始しました。活動場所は房総丘陵の中心部に位置する君津市清和地区です。同地区では、1960 年代までは炭焼きが主な生業であり、灌漑設備が完備する以前の農業は自給のための畑作が中心でした。



約50品種
のタネの
発見



小学校や地域の方々に協力していただき、清和地区の在来作物を調査したところ、約 60 サンプルの種子が集まりました。ヤエナリと呼ばれる緑豆やニホンカボチャなど、現在ではほとんど流通していない作物や、ゴマ、ササゲ、アズキなど国内自給率の低い作物などです。ここでは、このうち 2 種の在来作物について紹介します。

・ マナ／オカンナ

いわゆる菜っ葉の一種で、マナともオカンナとも呼ばれます。マナは正月に食べる雑煮の材料として使われます。地域の人によれば、マナとは「真菜」であり、「真実の菜っ葉」という意味だそうです。また、この地域では年神様(神棚)に、餅を入れない雑煮を供え、これをオカンと呼びます。オカンに使う菜っ葉という意味でオカンナとも呼びます。いずれにしても、大切な菜っ葉として意識されています。マナ／オカンナは、11 月 3 日頃に種子をまき、正月に長さ 5 センチほどに生長したものを使います。たとえば小松菜は、通常 20 センチ前後に生長したものを食べるので、その食べ方にも特徴があります。

・ コムギ

清和地区ではお盆の迎え火、送り火にコムギの藁を使います。近年はコムギを食用に栽培しないので、お盆用の藁のためだけに細々と自家採種を続けてきました。最近では稲藁を使う家庭が多いようですが、稲藁は燃やしてもコムギ藁のようにパチパチと音がしないので物足りないそうです。

以上、マナ／オカンナ、コムギはいずれも、地域の年中行事と結びついて伝承されてきたものです。在来作物の多様性の保全と行事の伝承とは強い結びつきがあることがわかります。これらの在来作物は、地元のおばあちゃんを中心とする NPO によって栽培されています。月 1 回の畑作業の日には千葉県内外から様々な人が訪れ、一緒に作業をします。

この作業を通して、栽培方法や細かな技術の伝承がはかられているのです。また、地域の公民館とも連携し、親子向けのイベントなどを一緒に開催しています。収穫した作物は加工して参加者みんなで食べます。地域の伝統的な食べ方だけでなく、新しい食べ方にも挑戦しています。コムギを例にとれば、コムギ粉の生地にあずきなどの餡をつめたお菓子(清和地区では「ホッたり焼き」)や、サルトリイバラの葉を敷いて蒸したまんじゅうといった伝統食の他、ピザやパン作りもおこなっています。



地域の働き盛りの人々にも活動に参加してもらうことを目指して加工食品づくりも始めました。在来作物を原料に菓子や総菜を作り、「おばあちゃんの畑」ブランドで販売することを通じて、この地域の「遺産」を保存していくための人材を確保しようという試みです。コムギを使った菓子類が主ですが、清和地区で昔から作られていた麦芽の飴を復活させるなどの活動も始まりました。

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2003 年 4 月	一般利用者	通年	房総丘陵	県立中央博物館 043-265-3111

2. 大鷲里山ファーム協議会

- 発表者 石井良幸, 白井 博
- 主催団体 大鷲里山ファーム協議会
- 発表内容

・活動の目的と経過

大鷲地区の活性化と世代間責任を果せる持続可能な里山を創造しながら、「都市住民との交流」、「山林・農地保全及び有効利用」、「景観形成」、「地産地消」などの推進及び促進を目指します。また、展開区域に約 100ha に及ぶ山林、農地の所有者が主体となり、一般社団法人房総農芸塾を設立して、里山の多面的な機能への活用、農業体験を通じた教育活動などに、大鷲里山ファーム協議会が一丸となって地域全域を含めての各種の里山事業が「大鷲の森」で展開しています。

・江戸時代の炭窯の再現

江戸時代からの炭窯を再現しました。脱臭、空気浄化、調湿効果やマイナスイオン作用などに効果のある炭を参加者自身で手軽にできる大変面白い里山活動

・翔和学園との交流

「翔和学園王国」と称して、若者たちの生きる気力を育て、底抜けの素直さや直向きな一生懸命さなどを、つくりあげてくれる里山を求めている活動で、拠点小屋づくり、龍神づくり、復田での稲刈り、開墾畑からの野菜の収穫そしてみんなで収穫祭、手作りのお神輿、など一緒に大鷲の森で体験、実感、感動、そして地域へこだましています。

事例報告

・翔和学園の活動拠点づくり

里地里山は、農地、樹林地など多様な自然環境を有する地域であり、長年にわたる人と自然の関わりを通



翔和学園生徒と看板設置



手作りお神輿で盛りあげ

じて維持・形成され、多種多様な生物の生息・生育環境としても重要な役割を果たす場所であるといえます。

そこで、地元住民、地元企業、利用者、その他ボランティアの人達の力の結集により、森が発する力、ここと身体を癒す森林浴効果を十分に発揮できる“障害をもつ子供達とともにつくる野外体験施設づくり”を実施しています。

①活動拠点づくりの意見交換会を開催

事前に、協力者が一同に会して拠点づくりの方向性や展開方法などの意見交換会を行い、実施に向け活発な意見交換をした。

- 特定非営利活動法人翔和学園
- 農業生産法人(株)千葉農産
- 一般社団法人房総農芸塾
- 君津大鷲の森開発プロジェクト(開墾隊)
- (株)Forest Savor 森林整備
- 大鷲自治会・大鷲里山ファーム協議会 etc

②活動広場（キャンプ場等）の構築

活動拠点の造成工事を地元住民及び地元企業の協力で行った。進入路、敷地造成を行い、危険防止のため柵を子供達が間伐材の伐採、加工を行い構築した。また、耐火レンガの再利用によるピザ窯を造り、みんなでピザパーティーをする。

③「大鷲の森」案内看板の設置

大鷲の森のふもとに、案内看板を設置する。看板作成は、地元の竹内啓さんが行い、大鷲里ファーム協議会、翔和学園の先生及び学生による共同作業で平成25年7月5日実施する。

④バンブーハウスによる活動拠竹林での伐採、ノコギリの使い方、竹の固定、

みんなで作りあげる達成感そして喜び、寸暇を惜しんで協力してくれた人達への感謝の笑顔に滲み出ています。



⑤翔和故郷の家建築

ブロックの積み方、材料の裁断、組立てなど全て自分達で体験しています。そして、普通ではとても体験できない、上棟式（棟上げ式）



という工事に関わった人が一同に会し、工事の安全を祈願し、お互いの協力の元に家をつくり上げていこうとする意思表示の儀式を自ら演出実行するなど「自の力で創り上げていく」という体験が将来の自立の基礎ともなるものと確信しています。

⑥その他の活動



みんなで田植えイベント



竹林での演奏会

活動開始	会員	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
2001年8月	20名	随時	大鷲の森 (君津市大鷲地先)	事務局：白井 博 0439-70-1031

3. 亀山オータムフェスティバル実行委員会

& かずさグリーン・ツーリズム連絡協議会

■発表者 鴫田英将, 豊島太樹

■主催団体 亀山オータムフェスティバル実行委員会

& かずさグリーン・ツーリズム連絡協議会

■発表内容



・オータムフェスティバルとは・・・

1999年より亀山湖の紅葉を盛り上げるために始まった秋の集客イベント。年々その良さは口コミで広がり、訪れるお客様は昨年主催者発表 10 万人を突破し、このエリアの集客としては一番の期待がかかる。

・実行委員会組織



観光協会がまた何かやっている！！

ではなくて、地元が一丸となって地元の良さを伝える素晴らしい機会であり、特に子供達へ地元の良さ観光の魅力を教えるきっかけになっている。誰かがやっているではなく、みんなでおもてなしをして取り組む。

・紅葉クルーズのきっかけは地元の為だった

もともと自然あふれる亀山湖、当然ながら手つかずの自然、人為的な紅葉ではなくそのままの紅葉でした。地域住民は目の前の当り前の紅葉で、それほど気に留めていませんでした。ただ川の上流の紅葉は見事で、それを知人に見せようと始めた紅葉クルーズが今はメインの観光商品となりました

・きっかけは JR 主催の駅からハイキング

もうひとつの楽しみ方はフリーハイキング。もちろん年間を通じてハイキングの良さがあ、各種コースが整備をされておりますが、秋の亀山は別格。とくに年に数日しか解放されない東京大学千葉演習林の一般開放は 4 日間で 5000 名を超すハイカーが楽しみに訪れる。



- ・ 多くのメディアに掲載される

昨年大きかった影響として、千葉県の秋の観光 PR ポスターに亀山湖の紅葉の写真が採用されたことです。これにより森田知事自らが発信塔となって、亀山湖の紅葉を情報発信してくれました。また多くのプレスリリースを行ったことで、新聞ラジオテレビと各種メディアに取り上げられました。



- ・ 地元と観光客との交流の場となるイベントの紹介

県内外から沢山の方がお越しになり、地元のお父さんお母さんがお店を出すふるさと物産市では、お茶をしたり会話をしたり、コミュニケーションをとることで、この地元の良さを多くの方が感じてお帰りになっています。もちろんお母さんたちの丹精込めて作った農作物やお新香は別格の美味しさです。



- ・ 亀山湖紅葉狩りクルーズ

決して陸からは見ることの出来ない溪谷の上流秘境を巡る 40 分間のクルーズ。手つかずの自然のありのままの紅葉は息をのむ美しさ。期間中のピークの土日には全ての席が埋まるほどの人気ぶりです。是非乗船いただきたい一番のおすすめ紅葉の楽しみ方です

- ・ フリーハイキング

大小さまざまな全 7 コースのフリーハイキングコースが設置されています。ご自身のペースで歩けるフリーハイキング、東大演習林の開放日には 5000 人を超えるハイカーが普段見ることが出来ない演習林内にいらっしやいます。

- ・ ふるさと物産市

地元のおもてなし。自家栽培された野菜や山菜、またお漬物、お米など、お父さんお母さんのふるさとの味が沢山並びます。ただ買うだけでなく、そこでお茶をしながら、会話を楽しんでいる様子もうかがえます。

まさに地域と観光客との触れ合いがここに 있습니다。

- ・ 亀山ダムウォッチング

ダムの放流や普段は入れないダム内部の見学又操作室の見学ができます。特別放流は目の前で見ることが出来るため、その迫力に圧倒されること間違いなしです。

- ・ おトク！バザー開店

地元亀山地区小中学校合同 PTA によるバザー。いいモノ掘り出し物が沢山ございます。PTA も子供も大きな声を張り上げながら元気よく販売しております。1 日だけですが、本当にたくさんの方が集まります。

・ 亀山オータムフェスティバル名物の大なべ豚汁

およそ 1000 人前を一度に作れる大なべで豚汁を限定で無料配布をしております。地元で作られた野菜とお味噌、こんにゃくで作った愛情たっぷりの豚汁は、土日に長蛇の列が出来るほど大人気です。

・ 今後の可能性とは

同じやり方をし続けていてはお客様が離れていってしまいます。今後のオータムフェスティバルの方向性、そしてイベントの意味とは！？

かずさグリーン・ツーリズム協議会 発表内容

【これまでの歩み】

農林水産省補助事業落選後も、メンバーの意識は高く、お互いのネットワークを活かしながら様々な協力関係が生まれました。全て協議会としての組織的な動きでは無く、自発的なコミュニティ・エンパワーメントの発揮による活動です。

・ 片倉ダム隣、地域アンテナショップ「森のおみせ」オープン、多くの観光客が現地を訪れ、薪割り体験、薪ストーブ体験、子どもにはザリガニ釣り体験、など都市住民と地域の交流が生まれました。

・ かずさの森、ログハウスづくり、お互いのネットワークを活かして、様々な方が県内、県外からログハウス作りに訪れました。

【これからの方向性】

君津亀山地域と、都市部の「都市農村交流」を開始します。

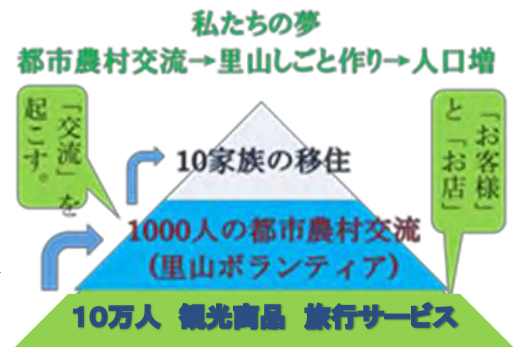
・ 交流目的は亀山地域で「里山産業」を生みだし、地域に「しごと」をつくることです。
・ 君津亀山地域単独ではなく、まずは既に里山活動を行っている交流のある長南町などと連携して都市農村交流を行う、組織がまだしっかり出来ていない亀山はそこに入れてもらうイメージ、誰でもかかれても交流ではなく、お互いの信用を第一にしてビジョンを共有できる関係性で交流事業を行っていきます。

・ 里山ボランティアから里山産業へ、産業を生み出してしごと作り、究極の目標は君津亀山地域に里山産業をつくり移住者を増やすこと、その為に農村側は、入り口(里山関連商品)づくり、都市側は出口づくり(里山関連商品の販路)と、入り口と出口を同時に作るワークショップを開講します(会場で資料配布)。

(交流先)

都市農村交流先：東京豊島区NPOエコ・コミュニケーションセンター

里山ボランティア活動などの実習先：長柄町NPO竹もりの里



活動開始	会員数	活動日・回数	主な活動場所	連絡先
1975 年～	4 4 名	年十数回 イベント毎	君津市亀山エリア	やすらぎ館 加藤 0439-39-2535

4. ステージ演奏

— ちば里山草笛音楽隊 —



・ 草笛音楽とは

ちば里山草笛音楽隊は平成 21 年 4 月に発足し現在隊員は 16 名です。パートは草笛が主体で他にケーナ、コカリナ、ギター、キーボード、篠笛等の編成です。

草笛隊の活動の目的として「草笛を通して子供達に自然への親しみを感じてもらう」「誰でも手軽に体験出来る多くの植物との接点作りを生み出す」「昔からの伝統的な野外遊びの草笛の伝承、普及」等を活動主旨としております。

・ 活動拠点と近況

千葉県船橋市二和東のウッディ工房内で毎月第 3 火曜日に集まって練習をしています。

現在演奏曲のレパートリーは 60 曲余、千葉県の童謡、アニメソング、フォークソング、演歌等バライティに富み、最近では AKB 48 の曲に挑戦中で悪戦苦闘！！



草笛の特徴としては葉っぱがあれば何時でも何処でも演奏ができる事、葉っぱの音はより自然の音に近く素朴な音で、子供から大人まで幅広く受け入れられる事、子供の自然環境教育には最適のプログラムになる事が挙げられます。

これまでの主な出演先及びイベント先は、NHKテレビ「こんにちは いっと 6 けん」（草笛を楽しむ）、NHKFMラジオ（草笛の魅力）、BSTBS ころふれあい紀行、ラジオパーク（日比谷公園）エコプロダクツ（ビックサイト）、キャンピングカーショー（幕張メッセ）、巨樹巨木フォーラム（君津市）です。

現在のはちば里山草笛音楽隊を接点として新しい自然体験プログラムを作成し実施しています。

興味のある方はお問い合わせください。（090-7836-4206：小林正幸まで）

5. パネル展示

本事業は、君津市の健康都市宣言を受け、里山の果たす役割の有効活用と市民の里山活動参加への支援と活動機会の提供活動のお手伝いをするを目的とて行われました。

そこで、広く同じ趣旨で活動する千葉県及び他市町村の団体とも連携を図り、君津市内の里山の保全、整備及び有効活用事業に関心を持つ個人及び団体が行う活動の情報交換の一環の場として1階ギャラリーでパネル展示を行いましたので報告します。

(1)出展者：室内23件、屋外3件（千葉県内）

(2)展示期間：平成26年5月15日午後から18日まで

(3)見学者：合計250名（16日21名 17日25名 18日200名）

出展者名

県域（里山センター含む）、千葉県立中央博物館、千葉県生物多様性センター、大鷲里山ファーム協議会、亀山オータムフェスティバル実行委員会、ちば千年の森をつくる会 NP0 ちば森林コンサーブ、長谷川自治会ホテルによる地域おこし、千葉県立君津青葉高校、浜子の歴史と景観を守る会、日本一のミツバツツジの里づくりの会、NP0 かずさ、NP0 久留里フィールドミュージアム、千葉県森林インストラクター会、NP0 稲村の会、宮下緑地をきれいにする会、内山緑地建設、千葉県立清和県民の森、プライベート散策遊歩道、NP0 法人グリーンキャンパス、里山と富士山の写真展、貞元地域まちづくり推進委員会、千葉県立君津亀山少年自然の家、ちば水源愛護会、君津市里山管理センター三舟の里、貞元甲冑会、久留里伝統黒文字楊枝伝承事業の会、（炭の会）富津竹炭の会

(4) 展示会の状況

展示初日と16、17日は関係者で一般客は少なく、しかし出品者同士の情報交換が行われる風景が見られた。18日の本番は会場が混雑するほど多く、副市長を始め県議、市議の方を含めシンポジウム参加者の殆どの方が見学したと思われる。

(5) 展示会を終わって

今回の展示は県域を始め君津市内の関係者を中心に行ったが、短時間で展示者が26件集まり、里山に関心が高い人が多いと感じた。

これだけ多くの資料が集まったので、展示会の広報を十分に行い、展示期間を長くする事で、多くの市民の方に見てもらえる事が出来たと感じた。



Ⅵ パネルディスカッション

里山・裏山・命山、その恵みと創造 —里山に託す私たちの未来—

コーディネーター 新井孝男

新井孝男

お待たせいたしました、これより、シンポジウムのディスカッションに入ります。もう一度、御手許の配布資料、33 ページをお開き下さい。繰り返しになりますが、本シンポジウムはテーマを「里山・裏山・命山 その恵みと創造」とし、①里山の持つ魅力を再認識し、②再び人々の生活に生かすために今何が必要なのか、③そして私たちが今何に取り組むことができるのか、そのうえで、④「里山に託す私たちの未来を」共有しようとするものです。

この立場から、基調講演と地元発表をお願いし、それぞれ素晴らしい内容のお話と発表をありがとうございました。

まず、登壇者のみなさまですが、ケビンさん、地元発表の皆さんは、既に紹介済みですので、お名前だけ申し上げます。手前からケビン・ショートさん、島立理子さん、白井博さん、鵜田英將さん、そして豊島さんです。(拍手)

最後はコメンテーターをお願いしております、中村俊彦さんです。

中村さんは、皆様ご存知の方が多いとは思いますが、千葉県立中央博物館の専門職員として長くご勤務され、この間「里山」という言葉の持つ意義と役割を、科学者の立場から全国に、世界に発信し続けておられます。里山をこのようにメジャーな言葉に育て上げた中心人物のおひとりです。現在は県立中央博物館副館長として、更に併任で千葉県生物多様性センター副技監という重責をお勤めでございます。

それでは、まず、コメンテーターの中村さんから、講演及び地元発表をうけ、里山の持つ意義と可能性を研究されてきた立場から、講演と発表内容との響き合いについて整理いただきたいと思います。



中村俊彦

ご紹介頂きました、中村でございます。私も第1回からずっと里山シンポジウムに参加してきました。昨年、第10回の節目の大会を終え、この里山シンポジウムと里山活動はどうなるのかと心配されていた方も多かったのですが、今回このように大勢の、また多様な方々が参加され、こんなに盛り上がった大会となって、私も嬉しいかぎりです。

里山の活動について私たちはまず、千葉の自然をベースに里山を語ってきました。里山のベースとしての自然ですが、まず海の自然については、黒潮と親潮が房総沖でぶつかり、これはまさに南と北のいろいろな生きものが出会う状況にあります。そして房総半島には東京湾の干潟、九十九里の砂浜、また南部の岩礁といった多様な海岸があります。また内水面の印旛沼や手賀沼、大きな利根川と江戸川、そして谷津の小河川など、きわめて多様で恵まれた水環境が千葉にはそろっています。この豊かな房総の自然について私は「人が生きていく自然としては世界でも一、二位の豊かさである」と言ってきました。昔の人は、その素晴らしい自然を決して壊すことなく、自然の恵を糧に私たちの先祖が生きてきた結晶として、この房総の里山があると言えます。

このような里山ですが、ケビンさんのお話でもありましたように、その意味は、かつては人が利用する林と草地のことだったのですが、ある日突然変異しました。それはアメリカから来たケビンさんが、日本で初めて、里山を、もっと広い範囲、林と草地だけではなく田畑や川沼、集落も含む多様な土地のモザイクとしてとらえ、語り出したのです。その突然変異は、ある意味では、里山が大きく進化した広がっていくきっかけになったのです。今日は台湾の里山の研究者の方々も来られています。まさにアメリカから日本、台湾とこの里山、そして里海や里沼、里川も含めた、自然と人、そして文化の関わりでできたこのような私たちの地域が、世界から注目を浴びるようになった。このことは大変素晴らしいことと思います。

そして、深い議論はされていませんが、今回のシンポジウムではさらに「命山」という言葉が出てきました。君津の方々が、里山について「命山」という素敵な言葉で表現されていることを発見できたことは、この君津大会の大きな成果であり、私にとってはこの上ない大きな喜びになりました。これから、里山の素晴らしさとともに、課題や、今後里山をどうしていったらよいかといった皆さんからの話を聞かせて頂き、またコメントさせて頂ければとおもいます。

新井

「命山」は生業の対象、生業の舞台である里山を自覚した文言と思います。ありがとうございます。それでは、「里山、裏山、命山その恵みと創造—里山に託す私たちの未来を」をメインとし、先にあげた4つの論点を中心に話し合いを進めて行きます。

まず前半の2つに関して、「この里山に関わりながらその意義と可能性をどのように考えているか」について発言をお願いします。

ケビン・ショート

里山の意義と可能性をどのように捉えているか？中村先生のお話の中にもありましたが、今から2000年前に、稲作文化を持っている人たちが関東に入ってきました。それまでの房総半島は、シイの木やカシの木が鬱蒼と生えた照葉樹林が広がっていました。稲作文化を持った人たちが、その原生自然をいったん破壊したんだね。その代わりに、別の生態系を持った環境を作り上げてきた。僕はこれこそ里山だと思っているんですね。これは2000年前ころから始まり、それから2000年間、ずっと持続可能な循環として暮らしてきた。2000年暮らしてきても、このように豊かな自然が残っている。人

間と自然が共に暮らす知識と知恵を持っていたんだね。ですからこれが里山の意義であり、これからの里山の目標でもあるんだね。僕から見れば、生物多様性も大事だけど、我々人間が、これからどういう形で自然と付き合っていくのか、そのためのヒントが里山の景観に隠されているんじゃないかと思っています。

島立理子

「おばあちゃんの畑」プロジェクトというのを通して、思っていることを申し上げたいと思っています。「おばあちゃんの畑」プロジェクトでいろいろな種子を集めています。例えばカボチャの種子、先ほどお話ししましたが、カボチャの種子だよと、白っぽいカボチャだよと、実際育ててみますと、それぞれのおばあちゃんの種子によって全部違うカボチャだったりするんですね。つまり種子はそれぞれ特性を持っている。それこそ、それぞれの家庭や地域で大事にしてきたものの中にこそ、実は多様性に富んでいるということがわかります。

それと、育て方のお話で、栽培と非栽培、あと、半栽培とかと私たちは勝手に言っているのですが、自然をうまく使いながら、あいまいなところで、実は多様性に富んだ育て方がある、あるいは採種をずっとしてきている。実は種類だけでなく、生物だけでなく、いろんな部分の多様性を、おばあちゃんの畑を見て感じる場所です。

新井

地域の中に、生活の場に入り込むと色々な発見があり、多様な姿が見えてくるという事ですね。では白井さんお願いします。

白井 博

里山の実感は。聞く、見る・・・の五感を通して人によってそれぞれにそれなりに満足させてくれる場所そのものです。特に子供たちにとっては、その中に入り込むと、無邪気にたくさんの笑顔が自然と生まれる舞台ではなかろうかと思います。里山は笑顔との共生の場であると実感しています。

新井

ありがとうございました。先ほどの勢いで鵜田さん、そして豊島さん、お願いします。

鵜田英將

里山を何とか言うほど里山について知っていないが、私の中では「いい所だな」と感じています。私の母が当地に来たときに、東京出身なのですが、「なんと良い所！」と言ったそうです。特に紅葉に関してなのですが、まだ当時オータムフェスティバルは行っていなかった訳で、紅葉が観光に結びついていなかったのです。

同じ紅葉ですが、仕掛けた事で紅葉が注目され、自然のままの紅葉の見方を変えて伝えてあげたら都会の人たちが来るようになった。自然は何も変わっていないが、伝え方を変えたり、見る角度を変えていく事がこんなにも都会の人々と結びつく事なのかと感じています。

豊島大樹

里山の持つ意味と可能性についてですが、今、里山についての意味について勉強中なのでコメントは難しいですが、可能性については、人と人との交流にあるのではないかと感じています。特に、都市との交流ですね。里山地域はどんどん過疎化が進んで行くと思います。そこで、これからの里山地域は都市とどう繋がって行くか、どういう交流関係を結ぶかが大事になってくると思います。

交流が起これば価値観の違う人たちとのミックスが起こると思う。

その事で、里山の景観を生かしたアート・・・が期待できる。今までは、里山の暮らしは人の暮らしに密着したものであった。今現在、我々の暮らしは変化しています。変化にあわせて里山もミックスして変化して行く事。例えばアートや音楽コンサートや教育目的だとか仕事に結びつけて、まきを作る拠点にしたり農家民宿だったり、様々なミックスによって可能性が広がると考えています。

新井

山の持つ魅力には歴史的に、長い期間蓄積されてきたもの、人々が自然に働きかけてきた歩みが包含されている。それをいかに探し出し、みんなのものにするか、里山活動を進める行動の中で自身が癒されたり励まされたりした経験を持っているが、それをより多くの人に知っていただく必要があるなど、多様な魅力と課題について発表がなされました。

フロアーの方で、今までこういう思いを持って活動してきた、里山を今まで意識しなかったが、いつの間にか里山というものが自分と深く関わっていると感じたなどということなど、多面的な発言をお願いします。

木更津の重田さん

県の森林政策室の職員さんから紹介されて参加した。鹿野山の麓に生まれ、現在木更津に在住しています。66歳の現在になって後世に何か残して行けるものはないかと考え、君津市の小糸地区に雑木林を所有し、5年かけて整備しています。ここを君津市民及び県民に開放しようと考えています。同時に中地区の農家の畑を利用協力して、アグリカルチャーとして皆さんのお役に立ちたいと思って活動しています。今日の講演で学んだ事を生かして活動を進めて行きたいです。

新井

活動に関わっているといろいろな事が見えてきますね。その他に発言者は・・・2名挙手されていますが。

柏市の福井さん

多摩の方で森作りに関わっています。ツーリズム的に里山を考えておられる方々には何人入ってきたかが問題になります。ある時で時期に多くが入ってきてにぎわうということとケビンさんの言う持続可能ということの間に齟齬がありませんか。どのように解決していこうとしていますか？どなたかご意見は・・・

新井

このことに関しては、後でご意見を頂く事にします。

君津市西部の関谷さん

以前狭義の里山が村のにぎわいとして活用されてきた事から100年が過ぎ、現在観光客が単なる目的地の一つとして、そこを訪れ、ぱっと見て、したい事をして、穫りたいものを穫って、ぱっといなくなる。里山を通り過ぎていく。今後、訪ねるルールを知らない観光客がますます増え行くだろうと予想される。この拡大する問題を早い段階で解決するためのアイデアについてご意見を頂ければ。

新井

里山を単なる観光や消費的に見る人たちが増えると、里山の本質とのずれがでる、先ほどの福井さ

んと近い部分がありますので、後でお話し頂きます。

佐倉市の方

里山の恩恵を多くの方に理解されていると思います。しかし、里山の所有者について維持管理問題もあり、また経済性のことも考えなくてはならない。しかし、都市住民が恩恵は受けているが、「あなたが綺麗にするのよ」「私がそれを見るのよ」では成り立たない。従って都市住民に里山の良さをどのように理解していただくかが問題であり、ここにいる方々はわかっていますが、わからない方にどうしたらわかって頂けるか、国民的な広がりをもどのように進めるのかを聞きたいです。

白井（大鷲の森）

里山は住む所でなく見る所という意見があるとの心配が出た。それでは問題だ。そうでなく、いつ若者に継承して行くのか、良い環境を作って子供たちの世代につなげて行く事が大切である。広大な大鷲の森を里山にしていこうと取り組んでいるが、何年かかれば若者たちが住めるようにしていけるのだろうかという思いで里山の保全に取り組んでいる。

新井

先のお二人の疑問にかみ合うご意見だったと思います。この意見を踏まえ、ここで、話の方向を後半の2つの課題に進みたいと思います。

里山を再考したり再創造して行くのに、どこに課題があるか、何が必要か、をまずは、壇上の方からご意見を伺いたいと思います。

豊島

住む里山がよいのか、見る里山が良いのかと言う問題でもあると思います。住む里山が良いと思うが、その前段階でその里山が好きになってもらわないと、住む気にならない。まずは見るだけでも良いので里山にきてもらう事から始めたい。そうすると、佐久間さんの言うようにただ来て里山にゴミを捨てて荒らしてしまうことも考えられるが、京都の事例ですが、観光に来た外国人の強引さにボランティアの方々が注意するそうです。同じように里山においてもボランティア精神が必要なのではと思っています。

新井

いろいろ心配はあるが、まず里山を知ってもらう、触れてもらうこと、そのうえで言うべきことは言っていこうということです。

豊島

まず、里山に来てもらうことからスタートしたいですね。

鍋田

手段と目的がありますね。オータムフェスティバルは、目的でなく手段です。まず来ていただくことが第一で、そして知ってもらうイベントです。知ってもらわなければ、ないものと同じです。来てもらってより一層知ってもらうために、どんな情報をその人に発信するか、情報発信できなければ発信できる人と連携してその仕組みを伝えて行くことが大切です。里山に住めない人は、そこに仕事がないとか、色々な状況があります。観光事業は大切な手段であると考えています。

白井

土地の所有者との関係についてですが、大鷲の森は新日鉄が持っていた土地を農業生産法人千葉農産が買い求め、里山の活動をよく理解した方が里山と農業の両立を目指して活動を進めようとしていたので、地元も理解して連携して活動ができています。

先ほど質問のあった、里山の整備が進めば進むほど多くの人が入り込んでくる、その人々と自然とのバランスをどう図って行くか、は明らかではないのですが、一緒に汗を流して里山を管理するように進もうとしています。

島立

私は主に自分の活動からしかお話し申し上げられませんが、いろんなイベントをしますと、確かに都会からいろんな人が来て、一緒に農作業をして楽しんでいただけます。ただ、現状として、例えばそういう持続可能な生活形態というものを次世代につなぐという意味では、都会の方たちが来て体験すると言うだけでは、実際問題なかなか難しいというのが現状です。その先どうしたものかなというのが、実は現在私が直面している問題で、地元の方たちがそこで何らかの活動を通して、生活していけるようなことをまず考えてゆくというのがますます大事なかなと。ちょっとその具体的な策というのはまだないのですけれど、実際そこに住んでいる人たちが住めるようなことを作っていくとか、なんというか、期待したいとか、がんばっていききたいなと思っております。

新井

正に「命山」であったが、今そこで生きていくのが難しい面が如実になってきている。そこに今の一番の課題があるということですね。ではケビンさん、里山を再興、再創造するためにはどうしたらいいか。何かアイデアや考えがあれば。

ケビン

さっきの話にもありましたが、千葉県は日本で一番山が低い県、一番山のない県です。500m以上の山がない県は千葉だけだと思う。千葉県は、原生自然がもつとも少ない県だと言ってもいいと思う。その反面、最も里山の多い県でもある。千葉は、日本の中で最も里山の恩恵に頼っている県だと思うんだね。上総とか安房の国に行くと、清澄山とか養老川溪谷とか、原生に近い自然もありますが、僕の住んでいる下総では、原生自然は全くないと言っていいくらい。あるのは、里山だけだね。そして我々人間が、自然との関わりを完全に切って生きようとする、絶対良くないんだね。体にも、心にも良くない。やっぱり人間は、ある程度、自然との関わりを持ちながら生活をしなければならない。そこで、千葉にある身近な里山、これはいつでもアクセスできる。そして自然や生態系が豊か。歴史的、文化的なメリットも持っている。文化自然遺産の一番大きなものが里山ではないかと思っています。

新井

予定の時間が迫っていますが、中村さんに今までの内容を少しまとめさせていただきます。

中村

里山、里海も含めてですが、利用と保全のバランス、これが豊かさを育んできました。ですから人の利用がなくなるといろいろ問題が出てくる。もちろん、利用し過ぎると疲弊しますが、利用がなくなってしまうと原生自然のようになってしまえば、イノシシやシカが増えて田畑を荒らす。そうするとまた人が入れなくなってしまう。そのようにこのバランスは非常に難しいところがある。しかし、それはその土地の人のやり方や、伝統的な知恵が最高であったとおもいます。ですから今の私たちも、

そこから学ぶしかないとおもいます。そしてまたみんなが力を合わせる。その土地の人と外の人が力を合わせることは単なる経済的なものだけではなくて、互いに汗をかくためにも里山の良さを見直す必要があるとおもいます。そのときには里山の魅力は外の人を引き込むキーでもあります。

私は今日、鵜田さんとお会いしましたが、この地域はかつてトキがたくさん所です。鵜田さんの名字は日本で千葉県が一番多いのです。トキやコウノトリ、先日いすみ市にコウノトリが飛来しました。千葉県には時々来ています。トキの方はまだ千葉には来ていませんけれども。いつか来る夢を持っています。それから今朝、君津駅から東京湾越しに富士山が見えました。これはまた素晴らしい景色です。土地の人は当たり前だと思われている方がほとんどとおもいますが、千葉から東京湾越しに見る富士山の素晴らしさは最高です。

ある意味で私は、外の人として君津の魅力を見つけました。土地の魅力は外の人でないと見えな多いものが多い。ですから外の人から魅力を見つけてもらい、土地の人は、その魅力を誇りにし自慢して頂く。これは「風の人」（外から来る人）と「土の人」（地元の人）ともいわれるコラボレーションです。そのような関係を是非高めていく。もう一つは、今日報告がありましたが、おばあちゃんやおじいちゃんと、子どもではなくて孫との結びつきです。おじいちゃんやおばあちゃんはいろいろな事を知っている。それを教え伝える。息子や娘は聞かないけれども、孫は一生懸命に聞く。その学びを孫たちは将来の地域の力にしていってもら。まさに生物多様性の宝庫である里山の動植物と人の命をつなげ、さらには奥山の富士山まで取り込んでしまう。そのような昔の人のマインドを思い起こして、私たちも、それを地縁の力としていく必要があるとおもいました。

フロアー発言者 A

すこし発言させてください。里山に都会から移り住んでもらいたいが、里山のほとんどが調整区域や農業振興地域となって難しい問題がある事を知りました。里山を含め宅地と農地に係る規制が多く、民有林も保全地域となって勝手に木を切る事ができません。市町村や中部林業事務所など行政の許可を得なければ整備できない状況がある。皆さんも知らない行政上の縦割りの問題等たくさんある事がわかりました。行政の中で改革を進めていただく必要を感じています

新井

今の話は重要な事で、今日のシンポジウムのまとめとして論議するつもりでした。里山の活動に携わることで縦割りでない、地域からの目で物事を見る、生活者の立場で見ると全体が見えてくることがあります。行政側の内部でも考えてもらわなくてはならない面が多々あります。今回、鈴木宗男会長が君津市役所等に働きかけ、本日は多くの担当部局の方が出席されています。里山に係わる市民と里山に関係する総ての行政部局が垣根を越え、智恵を出し合う、各地の市や村での里山活動がここから始まるのではないかと思います。

フロアー発言者 B

一言、言いたい。農業と林業の分野は封建過ぎて規制改革が必要だ・・・・・・（以下聞き取れず）

フロアー発言者 C

ナンセンス・・・・・・

新井

ただ今、発言がありましたが、時間も迫っております。

現在ある制度にはそれなりの歴史と必要性があつてできてきています。一方的にだめだといっても何も進みません。関係者がその本質を理解し、その役割を理解し、里山が何故今まで守られ存在してきたのか、そのうえで、現在に生かす知恵を出し合うことが必要です。

多面的に里山を見たとき、その広がりの中に、緩やかな関係にこそ夢を育むことを期待することができるのではないのでしょうか。

先日の朝日新聞で、鈴木会長が自分たちにとってこの山は、裏山は命山だった、生活の場だった、生活に無くてはならない場だった。里山が経済的に回転するような、生産の場としての位置づけをしなくてはならない。単に都会の人と交流する場だけでなく、共にその地域を創れるようにならなくてはならない。と述べておられます。いろいろな立場がありながら、ここにお集まりのすべてのお力により、より里山が賑わい、地域がより元気になるように考えて行かなくてはならないわけです。

時間が過ぎております。多くの発言ありがとうございました。不十分な部分もあったと思いますが、里山活動推進に役に立つ大きな収穫もありました。以上で討論を終わりたいと思います。

本シンポジウムのまとめは、あえて行わず、第 11 回にして初めて「ちば里山宣言」を皆さんの創意と総意によって決議し、発表しようと考えておりますので、その宣言に譲りたいと思います。

登壇者の皆様、そして会場の皆様、ありがとうございました。(大きな拍手)

それでは、マイクを司会の小西さんにお返しします。

フロアー発言者 D

午前中から台湾の方々が参加されております。台湾から参加の先生が「最終的に里山を考える事は宇宙船地球号を考える事なんだ」と言われた事に感銘を受けました。遠く台湾からお越しただいて、このような教えをいただきました事に拍手で感謝を伝えたいと思います。

実行委員の風間俊雄

同感です。台湾との分科会担当の風間です。私からも台湾の方々の紹介をお願いいたします。

実行委員の小西由希子

台湾の方々のご紹介が遅れて申しわけありません。台湾からお出で頂いた方々には、本日午前中の「台湾の里山保全活動紹介と交流」の分科会において、台湾における里山活動についてそれぞれの立場から報告をいただきました。私も分科会に参加していましたが、おかげさまで、活発な討論と交流が実現したことをここで報告させていただきます。

それではご紹介いたします。

国立台湾師範大学教授 蘇 淑娟 さんです。

美濃龍肚國小教務主任 黄 鴻松 さんです。

株式会社建設環境研究所 陳 雅文 さんです。

国立高雄師範大学副教授 劉 淑恵 さんです。

以上 4 名の方たちです。遠くから誠にありがとうございました。(大きな拍手)

本記録について

ディスカッション等の記録は音声データをもとに、編集しましたが、発言者の氏名等で聞きとれないものもあり、又発言内容も編集上の都合で要約したり、補足したりするなど、適宜整理させていただきました。ご容赦下さい。

コーディネーター 新井孝男, 事務局 尾形孝和

●大会風景 2：みんなの熱弁



Ⅶ 千葉の里山関係資料

1. コメンテーター資料

里山の重要性と課題，そして再興への方向性

千葉県立中央博物館・生物多様性センター 中村俊彦

1) 里山とは

里山という言葉は，林業政策に関する江戸時代の記録文書から登場する．その里山は薪燃料や落ち葉，また山菜・キノコ・薬草，木材などを得るために人が管理する人里近くの雑木林や植林地を示すものであった．しかし，最近では，このような林地すなわち「里山林」だけでなく田畑や川沼，草地，さらには集落までも含む農村の自然環境をさす言葉として用いられてきている．

すなわち「里山」とは，「里と山」あるいは「里から山への自然環境に根ざした人々の生活・生業がつくりだした多様な環境モザイクのセット」であり，その基本単位(景相)はかつての村の領域と重なる．そしてこの各地の里山のネットワークは，人々の生活・生業をつなげるさらなる流域単位のユニット，すなわち「里山里海」の空間構造と機能概念に至っている．

千葉県の「里山条例」が示した里山の概念や課題，その対応等は，いわばこの広域な空間概念の里山を行政としていち早く取り入れ対応した先進事例として高く評価され，この里山概念と重要性については中学・高校の学校教科書にも取り上げられるようになっている．さらに，これは国際的にも注目され現在，日本が世界に発信する「SATOYAMA イニシアティブ」の基盤にもなった．

2) 里山のタイプ

多様な環境の複合領域としての「里山」であるが，その立地条件により4つのタイプがみられる．

- ① **平野里山**は，広い水田に囲まれた集落では米づくり中心の生活・生業のなかでさまざまな行事や祭りが育まれた．洪水の多い立地であるが，災害時の助け合いの組織や防災技術が培われた．
- ② **谷津里山**は，台地に樹枝状の細長い谷が入り込む谷津地形にみられ，台地上は畑，斜面林に囲まれた谷は湧き水豊富で谷津田となった．風水害は少なく，人の暮らしは縄文時代にまでさかのぼる．
- ③ **台地里山**は，水を得にくい立地のためかつてその多くは牧場や茅場であった．江戸時代以降の開墾によるものが多く，家屋と畑，林地が短冊状にまとめられた集落や，開村の順番が地名に示されている所もある．
- ④ **山間里山**は，広大な森林と肥沃な土壌条件により林業をはじめ焼畑や狩猟も営まれた．豪雪に土砂崩れや地滑りも多い山間地であるが，水が得やすく陽当たりの良い所は自然の恵み多い豊かな場でもあった．

このような里山のほかに，常に人と自然がかかわり合う複合領域の基本単位として「里海（干潟里海，砂浜里海，磯里海）」や「里川」「里沼」も認識される．

3) 里山が豊かな生物多様性を有する理由

人の営みがもたらした里山自然であるが、そこは生物多様性の宝庫となっている。里山に生物多様性を豊かにする”からくり”は以下の4つに整理される。

① 多様かつ連続的な水環境の創出。

奥山の水源から海まで、人々の利水や治水による多様な水環境のネットワーク，とりわけ稲作による水田や水路，ため池等の人為による水環境の創出は，動植物の生息・生育環境の安定性を高めた。

② 異なる遷移段階のモザイク構造

人が自然を手入れすることによって，森や林，草原など時間軸で異なるさまざまな遷移段階の環境が常に空間軸のモザイクとして保たれ，多様な動植物の生息・生育環境の創出と保持につながった。

③ 作物や家畜の移入と新たな品種づくり

人々は，より豊かな暮らしのために作物や家畜など外部からさまざまな動植物を取り込み，さらに各土地に適し根ざしたいろいろな品種もつくり出した。

④ 節度ある利用と自然を守る文化

自然のリズムのなかでの人の生活・生業は，自然を畏れ敬う畏敬の念とともに節度ある資源利用によって，自然を守り，その恵みを長く得続けるための文化を育んだ。

4) 里山の素晴らしさ

人・自然・文化が一体となって調和・共存し，豊かな生物多様性がもたらす里山は，人々にさまざまな恵みをもたらしてきた。このような里山の素晴らしさは以下のように整理される。

① 人が育んだ豊かな生物多様性と生態系サービス（自然の恵み）

里山での人々の生活・生業は，自然の豊かさを損なうものではなく，むしろその自然環境のポテンシャルを最大限に引き出すものであった。その結果，里山では生物多様性を高め，人々にもたらされる生態系サービスを向上させてきた。

② 資源を自立・循環させる持続可能な生態系

里山という，限られた領域での人々の営みは，資源利用の節約，再利用を基盤とした資源を自立・循環させる生活スタイルであり，これはまさに今，世界が探求している持続可能な社会への生態系モデルである。

③ 地縁がもたらす助け合いと分かち合いの社会

地縁，すなわち限られた領域の自然資源を基調とした人々の暮らしにおいては，資源を効率的かつ持続的に得るシステムとして，そこに暮らす人々の助け合いや分かち合いの社会が作り出された。

④ 美しい自然景観と伝統・文化が育む豊かな心

豊かな動植物と美しい自然景観のなかでの人々の暮らしは，自然への畏敬の念とともに自然と調和・共存する伝統・文化をもたらし，豊かな自然観，生命観，さらに生物・生命を互いに思いやる心を育んだ。

5) 里山の課題

科学技術の進歩と都市の拡大によって人間社会は、人工化とグローバル化を進め、その結果、資源・エネルギーの外部依存を強めていった。経済発展を最優先にしてきた日本、とりわけ1960年以降の高度経済成長には、「自然破壊」と「環境汚染」が拡大し、また温暖化等、地球規模での「気候変動」も進んだ。さらに近年では、一次産業の経済事情等により「耕作地や林野の放棄」が拡大している。

このような状態は、里山を大きく衰退させ、その恵、すなわち生態系サービス（食料や水等の供給サービス、気候緩和や水質浄化等の調整サービス、豊かな自然観・生命観を育み、芸術や信仰等の文化サービス）を著しく低下させている。

都市周辺の「都市化進行地域」の里山里海域では、人口増加や都市開発のために自然破壊・環境汚染が進み、ヒートアイランド化や外来種の増加も著しい。その一方で都市から離れた里山里海では、人口流出と高齢化の進む「過疎高齢化地域」が拡大している。そこでは土地の利用・管理が低下し、放棄された田畑や手入れされない森林が増加しており、その結果、イノシシやシカ等の野生鳥獣の急増により農作物被害も大きくなっている。

そして両地域を覆う課題としては、温暖化等の地球規模の気候変動、さらには放射能や農薬起源等の化学物質をはじめさまざまな有害物質による大気・水、土壌等への環境汚染の拡大、さらにそれを助長させる廃棄物の不法投棄等が里山荒廃の大きな要因になっている。

里山の生態系は崩壊寸前にあり、その負荷は次世代がこうむることになる。

6) 里山の将来シナリオ

里山の将来については、その魅力発掘とともに自然・文化の資産価値を向上させる対策（地域の自然及び社会環境調査、生物多様性地域連携協議会、フィールドミュージアム、里山バンキング、観光ツアーガイド、冬水田んぼ、炭による土壌改良、美しい村コンテスト等）、また都市からの人の移住、交流の促進や経済支援の対策（災害支援・避難協定、里山活動協定、自然体験教育、森林療法・療育、アグリツーリズム、市民農園・農村別荘、農村休暇制度、森林水源税、環境直接支払等）、すなわち都市の人的、資金的な力を里山に引き入れ、一方では里山の豊かな生態系サービスを都市に振り向けて両方の人的また生態的な絆をとりもどす対策が必要である。

里山の現場における豊かな生物多様性と健全な生態系の保全・再生については、人々の土地の「おもしろい」に育まれた助け合いと分かち合いの伝統を学び、新たなコモンズとして「地縁」を尊重する社会の再興が求められる。その際には、里山に暮らす人々、いわば「土の人」の知恵や伝統を地域の「誇り」とし、それとともに外部の人「風の人」の視点で「魅力」の発見・掘り起こしを促す対応が求められる。このような機能を担ってきた中間支援として、千葉県では「千葉県里山センター」および「里山シンポジウム委員会」が大きな役割を果たしてきた。これらの活動に対する評価は全国から国際レベルに達しているが、更なる充実が期待されている。

各地の里山里海の実態をふまえた再興のシナリオとしては、「地産地消(ローカル)－交流貿易(グローバル)」「自然文化(自然)－近代技術(人工)」の2軸を踏まえた以下の4つが描かれる。

I. テクノタウン里山里海（交流貿易・近代技術）：高度な科学技術による植物工場で、グローバルな資本・労働や遺伝子組み換え生物による大規模な栽培などにより、量的最大化を目指した生産活動。

II. ガーデニングむら里山里海（交流貿易・自然文化）：自然の保全・再生を基調とした環境保全型の生産活動を軸とするも、資本や労働力、また生産素材の調達や生産物の消費についてはグローバル展開。

III. ふるさとタウン里山里海（地産地消・近代技術）：地域資源をはじめ地域の資本や労働力を基に、最新の科学・技術を駆使した資源・エネルギーの循環効率を最大化させ、自立的生産活動。

IV. 故郷のいなかり山里海（地産地消・自然文化）：かつての里山里海での知識や伝統技術に基づく生活・生業を復活させ、地域の自然と文化を素地に、その範囲内の資源・エネルギーによる生産と消費。

いずれにしろ、このような里山再興は人・自然・文化が調和・共存する持続可能な社会の前提であり、それには、旧来の市場経済と競争原理に基づく価値観から、地域の自然を守り土地に根ざした人々の文化を尊重し、さらに地球環境全体をふまえる暮らし、すなわち生物・生命・いのちの助け合いと分かち合いに基づく生物多様性の価値観へのパラダイムシフトが求められる。

7) 参考文献

以上の内容は、以下の千葉県の里山に関する文献を参照しまとめたものである。なお、関東レベル、国レベル、国際レベル、いずれの文献も編集、執筆等で千葉県もかかわっている。

- (1)ちばの里山里海サブグローバル評価中間報告（千葉県生物多様性センター研究報告2）
2010. 千葉県生物多様性センター（編）. 179pp.
- (2)生物多様性ゆたかな持続可能な社会に向けて：ちばの里山里海サブグローバル評価。
2010. 千葉県生物多様性センター(編). 日本語版と英語版. 各 8pp.
- (3)ちばの里山里海サブグローバル評価最終報告（千葉県生物多様性センター研究報告
N0.4）. 2011. 千葉県生物多様性センター（編）. 249pp.
- (4)里山・里海の生態系と人間の福利：関東中部の経験と教訓. 2010. 国連大学高等研究所（編）. 130pp.
- (5)里山・里海の生態系と人間の福利：日本の社会生態学的生産ランドスケープ(概要版).
国連大学高等研究所(編). 2010. 日本語版と英語版. 各 36pp.
- (6)里山・里海：自然の恵みと人々の暮らし. 2012. 国連大学高等研究所・日本の里山・
里海評価委員会（編）. 2001pp. 朝倉書店.
- (7)Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being : Scio-Ecological Production Land-
scapes of Japan. 2012. Anantha Kumar Duraiappah, Koji Nakamura, Kasuhiko Takeuchi and
Maiko Nishi (ed.). 480pp. United Nations University Press.

2. 第3次里山基本計画の概要について

平成 26 年 5 月 18 日
千葉県農林水産部 森林課
電話 043 (223) 2953

里山の持つ多面的機能が持続的に発揮されるよう、県では平成15年に「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例（里山条例）」を制定し、里山基本計画に基づき、団体・企業等多くの方々の参画を得て里山整備を進めてきました。

この度、里山条例制定後10年間の成果と課題をふまえ、平成29年度までの第3次里山基本計画を策定しましたので、お知らせします。

1) 里山条例制定後10年間の成果と課題

【成果】

- 里山活動のための総合窓口の設置…問い合わせへの回答、企業とのマッチング、安全講習等を行っています。
- 里山活動の定着…活動団体が22協定（H15）から122協定（H24）へ増加しました。
- 市町村による里山活動への支援が広まりました。
- 里山公開講座を実施しました。

【課題】

- 地域の状況に応じた新たな里山活動の展開
…都市部周辺での間伐等森林整備への継続的な取組み、防災林再生への参加 等

2) 第3次千葉県里山基本計画

- （1）目指す姿 「新 輝け！ちば元気プラン」や「千葉県農林水産業振興計画」に基づき、地域住民や多様な人々の参画により、里山を中心とする豊かで美しい景観が保全され、地域の活性化が図られることを目指します。

- （2）計画目標 里山活動により整備された面積
170ha（H24年度末） ⇒ 250ha(H29年度末)

（3）計画の特徴

第3次計画では、森林の防災機能の強化等、里山に対する様々な要望が高まっていること、里山活動が地域づくりの中心として重要性を増していること等を踏まえ、地域の課題解決に向けた、各団体・企業等の継続的な活動を促進します。

【主な取組み】

- 知事認定を受けた団体による里山活動に加え、広く里山の整備等を行う団体・法人による継続的な里山活動を市町村と連携し支援していきます。
- 東日本大震災等により森林の防災機能が再認識されており、防災林の再生等についても里山活動の一環として支援していきます。
- 地域の里山、特に間伐等の森林整備へ積極的に取り組む団体が増えつつあることから、これらの活動を支援していきます。

1) 里山とは・・・

「里山」は、人々の生活に深く関わりながら維持管理されてきた樹林地等、房総の原風景を形成してきました。現在、農林業者の減少や高齢化等により、手入れがされず放置される里山が増加しています。

2) 「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」について

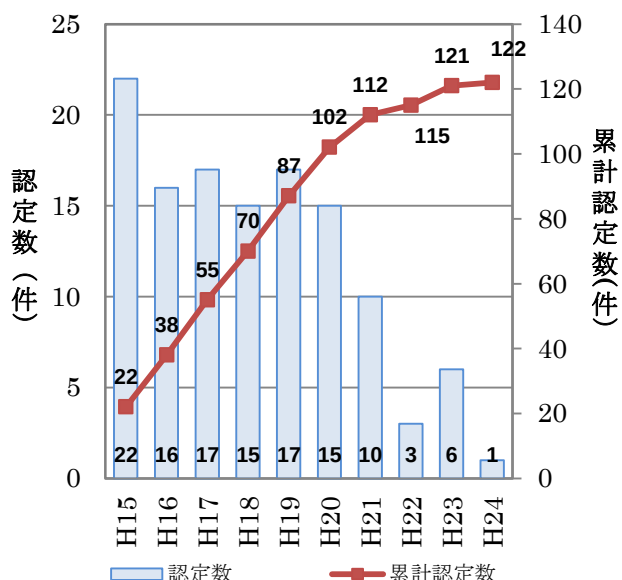
里山の保全・整備は、長い間土地所有者に委ねられてきましたが、適正な役割分担の下に県民全てがこれに関わるとともに、余暇や教育に係る活動の場等として里山の活用を進めることにより、人と里山との新たな関係を構築し、豊かな里山を次の世代に引き継ぐことを目的として、平成 15 年 5 月に施行されました。

3) 里山活動協定認定制度の実績

里山条例では、土地所有者等と里山活動団体が森林整備等についての「協定」を締結し、それを知事が「認定」する里山活動協定認定制度が設けられました。

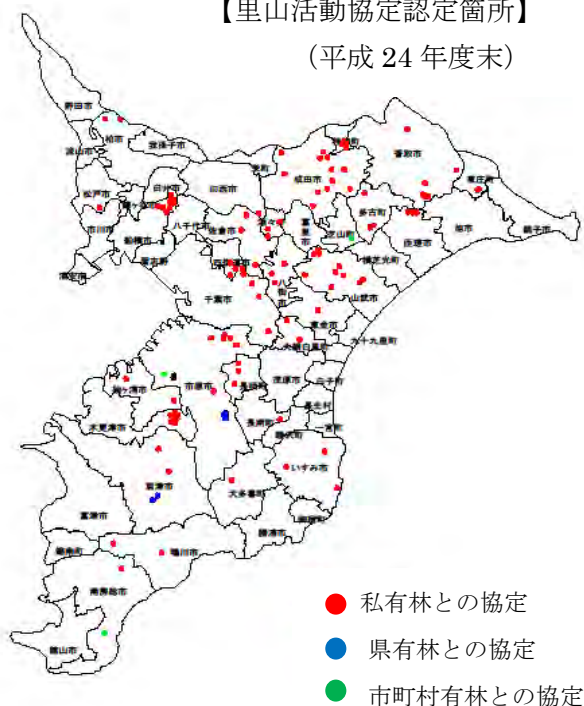
【平成 24 年度末の実績（累計）】

認定数：122 件 認定面積：170ha 活動団体数：83 団体



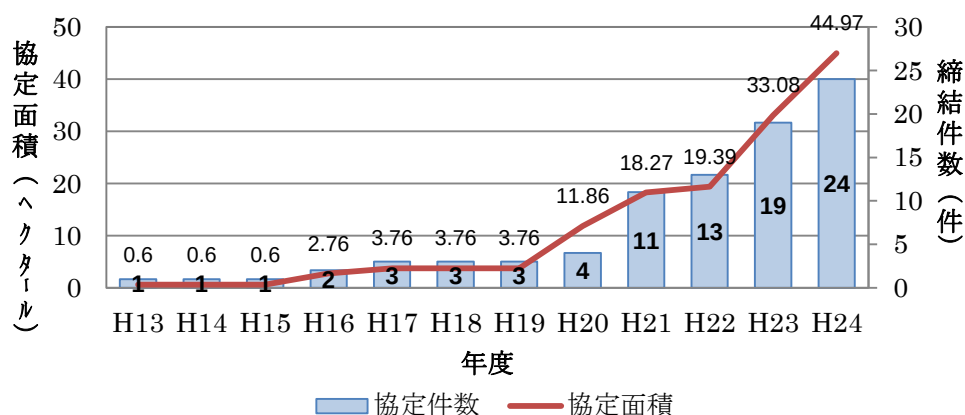
【里山活動協定認定箇所】

(平成 24 年度末)



4) 法人による活動協定締結数と面積の実績

県と企業が森づくりのための協定（法人の森協定）を締結し、企業が森林づくりに取り組んだ件数と面積



3. 第3次千葉県里山基本計画

平成26年3月

I 里山基本計画の趣旨

農林水産業などの営みと自然とが調和しつつ維持されてきた里山は、多様な生き物の宝庫であるとともに、森林・谷津田・水辺等が一体となった美しい景観を形成する県民にとって貴重な財産です。

この里山は、良好な景観の形成はもとより、地球温暖化防止や豊かな生物多様性と生態系などの保全、災害の防止、教育や憩いの場の提供、伝統的な生活習慣の継承等の多面にわたる公益的機能を私たちにもたらしてきました。

一方、手入れをされない森林や耕作放棄され樹林化が進む農地の増加等によって、これらの多面的機能が低下してきました。

そこで本県では、里山の持つ多面的機能が持続的に発揮されるよう、「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例（平成15年千葉県条例第5号、以下「里山条例」という。）」を制定し、県民参加による里山活動を促進する施策を展開してきました。

その後10年が経過し、活動する団体が増加かつ多様化する一方で、平成23年3月の東日本大震災では本県も大きな影響を受けました。

この「第3次千葉県里山基本計画」は、里山条例第9条の規定により策定した「第1次千葉県里山基本計画」及び「第2次千葉県里山基本計画」による成果と課題、その後の社会情勢の変化を踏まえ、千葉県総合計画「新 輝け！ちば元気プラン」及び「千葉県農林水産業振興計画」の下で、里山活動の基本的な方針を定めたものです。

II 10年間の成果と課題

平成15年5月に里山条例が施行され、10年が経過しました。

この間、「第1次千葉県里山基本計画」及び「第2次千葉県里山基本計画」を策定しており、10年間の取組の成果と課題は以下のとおりです。

1 里山活動の展開

(1) 協定の締結による里山活動の定着

里山活動協定の認定の促進や里山活動に関する支援やイベントの開催等を行った結果、

10年間で122件の里山活動協定が認定され、2次計画の目標の160件には及ばなかったものの、多様な活動が展開されるようになりました。

(2) 「法人の森制度」の発足と充実

里山条例の制定と前後して、企業の社会貢献活動が活発になり、県は企業から森林づくりへの参画要望を受け、平成14年に「法人の森制度」を発足しました。

企業の参画のあり方としては、千葉県森林面積の9割をしめる私有林の整備を促していくことが必要ですが、まず企業が森林づくりに参画しやすいよう、県有林をフィールドとして利用する形態で整備を開始しました。

また、平成22年に策定された「第2次里山基本計画」においても、企業の参加が位置づけられ、現在19法人により、24箇所、約45haの森林が整備されています。

(3) 森林整備によるCO₂吸収量認証制度

里山活動や法人の森への県民や企業の参加を促すために、平成21年に森林整備による「地球温暖化防止の認証制度」を創設しました。これは、計画的に行われた森林整備の効果を目で見える数字とするものです。

平成25年9月末現在で16件の里山活動に対し、CO₂吸収量の知事認証がなされています。

2 里山活動への支援

(1) 里山活動のための総合窓口の設置

県では里山活動団体への支援のため、中間支援組織の協力を得て団体・土地所有者及び企業に対して情報提供、助言、指導を行うワンストップサービスを展開してきました。

(2) 市町村による里山活動支援

里山活動は、都市住民や地域住民が一体となった

《事 例》 八千代市における谷津・里山保全計画の策定

八千代市では、市域北部に残された谷津田と森林を保全するため、平成20年度から検討会を設置し、平成22年度には独自の「八千代市谷津・里山保全計画」を策定しています。

地域づくりを進めていく上で、欠かせないものであることが認知されつつあり、市町村による積極的な里山活動支援も増えてきました。

(3) 里山公開講座の開催

平成16年度から22年度まで、県と里山活動団体の共催により「里山公開講座」が行われました。テーマは「広葉樹林・人工針葉樹林別の管理手法」、「竹林拡大防止」等の7つであり、その内容は「里山公開講座ガイドブック」として冊子にまとめられ、公開されています。

3 今後の課題等

これらの成果があった一方で、東日本大震災の発生等もあり、10年前と現在では社会情勢も大きく変化しています。これに伴い、里山に関する施策についても、新たな展開を図っていく必要があります。

また、この10年間で里山活動は社会的に認知され、中には、森林整備の技術を高め、間伐等の県の森林整備事業を行い、団体の運営を行っているところもあります。

「第1次千葉県里山基本計画」及び「第2次千葉県里山基本計画」ではこれまで、里山活動協定数(里山活動団体)を増やすことに重点を置いてきましたが、今後は、各里山活動団体がそれぞれの活動の専門性を高め、里山活動が地域社会において一層評価が得られるよう、努めていく必要があります。

また、東日本大震災による津波により、海岸保安林が大きな被害を受けたことから、市町村、企業、里山活動団体から県に対し「この再生に参画したい」との要望が数多く寄せられました。この取組は主に「法人の森制度」を利用して実施されています。

県としてもこれらの活動が拡大するよう支援や助言を行っています。

「第3次千葉県里山基本計画」では、このような取組を踏まえ、新しいステップに入った里山活動の基本的な方針と総合的かつ計画的に講ずべき施策を定めます。

Ⅲ 計画期間

平成25年度から平成29年度(5か年)

Ⅳ 里山の保全、整備及び活用に関する施策についての基本的な方針

1 基本的な目標

(1) 目指す姿

「地域住民や多様な人々の参画により、里山を中心とする豊かで美しい景観が保全され、地域の活性化が図られています。」

多様な人々と地域が一体となった里山の保全・整備活動が展開されることにより、里山の景観が保全されるとともに、農林水産業など地域の特色を生かした産業の振興や地域資源の活用により、里山を中心とした地域の活性化が図られています。

(2) 里山活動の目標

里山活動団体や企業が整備・保全する里山を250haに増やします。

	基準年度 (H24年度末)	目標年度 (H29年度末)
里山活動団体が整備・保全する森林の面積(ha)	170ha ※知事認定団体累積	250ha ※里山活動団体 ^{※)} 、法人の森合計

注)「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」第2条による里山団体とします。

「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」(抜粋) 第二条 二 里山活動団体 里山の保全、整備及び活用に係る活動を積極的かつ主体的に行う団体をいう。

2 取組の方針

(1) 多様な人々の参画による里山の多面的機能の発揮

地域住民、企業、大学、里山活動団体など多様な人々の参画の下、竹林の拡大(侵入)への対応や、海岸保安林の再生等、里山活動の対象をより広くとらえることにより、県土保全、自然災害による被害の軽減、水源かん養や地球温暖化防止、生物多様性の保全等の多面的機能が発揮される里山活動を促進します。

《事 例》 山武市における地域協議会による取組み

山武市では、地元によく植栽されているサンプスギを中心とした地域活性化に取り組み、千葉大学や地域の関係者による協議会により検討を進めてきました。その結果、協議会や地元林家、NPO 法人等による間伐推進の取組みがなされるようになりました。また、若いスタッフを中心とする里山結婚式等の新たな試みが派生しています。

(2) 里山資源の有効活用による地域の活性化

緑豊かな里山の景観や伝統文化、再生可能な木質バイオマスなど里山が有する資源を活用し、環境の保全や地域の活性化につながる里山活動を促進します。

《事 例》 山武市、NPO 法人による木質バイオマス利用の取組み

山武市では、薪やペレットを燃料とするストーブ、ボイラーを導入する市民に助成を行っています。また、NPO 法人が取り組む「木の駅」プロジェクト（林家が搬出した丸太を一定価格で買取り）についても、買取価格の一部を助成しています。

《事 例》 南房総市における温室暖房機への薪利用の取組み

花き園芸のさかんな南房総市では、地域の森林組合と協力し、温室暖房機の燃料として薪を利用する取組を進めています。協議会の設置、薪暖房機の試験的導入による効果の検証を経て、平成25年度から補助事業を開始しています。

《事 例》 南房総市における NPO 法人による取組み

地元農家、市役所職員、建築家、ランドスケープデザイナー等多様な職種のスタッフにて構成された NPO 法人が、東京都と南房総市の里山を結び、里山学校・市民農園・食の二地域交流等を目指し活動中です。地域が活性化する起爆剤となる有効な案を模索すべく、古民家を活用したワークショップ、防災をテーマとする集落座談会等を開催しています。

(3) 主体的かつ継続的な里山活動の促進

それぞれの地域の課題解決に取り組む里山活動団体の活動を促進し、その継続を図るため、市町村との連携を促進します。

また、里山活動の継続には、団体としての基盤強化やマネジメント等が重要であることから、これら必要な手段の獲得を支援します。

《事 例》 船橋市における里山活動団体による森林施業の受託

船橋市では森林組合が解散していたが、市の里山講座の卒業生及び既存の森林ボランティア有志が林業改良指導員のアドバイスを受け、平成17年に施業計画受託団体を発足しました。現在では、多数の森林所有者から 100 ヘクタールを超える森林の管理を受託しています。

費用には、国の森林整備事業補助金、森林所有者からの負担金を充て、作業に従事した団体メンバーに賃金を支払う有償ボランティアの形態をとっています。

森林施業計画を樹立した森林は、相続税・贈与税の評価額が軽減されるため、森林所有者にとって税制上のメリットもある仕組みとなっています。

(4) 地域の防災対策に役立つ里山活動の促進

海岸防災林の植林と育成、里山の木材を利用した薪・炭の活用等地域の防災対策を視野にいたした里山活動を促進します。

《事 例》 山武市における NPO 法人による海岸防災林再生の取組み

広域で活動する法人が、県と「法人の森協定」を締結し、津波や松くい虫被害により荒廃した九十九里海岸（山武市蓮沼）の保安林約1.41ヘクタールの植林、育成に取り組んでいます。

V 里山の保全、整備及び活用に関し、総合的かつ計画的に講ずべき施策

1 多様な人々の参画の促進

(1) 里山活動の総合窓口の充実

里山活動充実のため、相談や問い合わせへの対応、企業と里山活動団体のマッチング等里山活動

全般をサポートする核となる団体の育成・強化に努めます。

具体的には、里山活動に関するワンストップサービスの窓口となる中間支援組織を支援します。

(2) 里山活動への県民参加の促進

5月18日の「里山の日」を中心に、市町村や里山活動団体、ネットワーク組織が連携してイベント等を開催することにより、里山活動の裾野を広め、活動内容を県民にPRするための取組を促進します。

また、大学、森林・林業に関わる仕事を希望する若者、木造建築家、クリエイター等、様々な立場、職種の人に関わってもらうことにより、地域に役立つ里山活動を進めます。

2 里山資源の有効活用

(1) 都市と農山村の交流の活性化

緑豊かな自然環境や伝統文化、豊富な農林水産物など里山を中心とした地域の魅力のPRを行うとともに、里山活動体験などを通じて都市住民と農山村の交流の活発化を図ります。

(2) 間伐材等の木質バイオマス資源の活用

東日本大震災において生活基盤が被災した経験から、地域における身近なエネルギーの確保が見直されるようになりました。

このため、里山において多量に存在する林地残材や未利用材などの木質バイオマスを活用することを促進します。

3 里山活動充実の支援

里山活動の裾野を拡大し、活動の継続を支援するため、長期間継続して活動を行っている里山活動団体や、特色ある活動を行っている里山活動団体等、地域に深く貢献している里山活動団体を広く紹介します。

また、団体運営に必要な情報を研修等の形で提供し、円滑な運営を促進します。

4 技術的な支援

(1) 技術講習会の開催

林業サービスセンターにおいてチェーンソー・刈払い機などの林業用機械の講習会を開催し、里

山活動の安全性の確保を図ります。

さらに、レベルアップを希望する里山活動団体に対しては、各種の資格取得も含めた研修、GPSやGISを活用した調査法等に係る研修を行い、専門的な技術を有する団体を育成します。

(2) 里山巡回相談の実施

里山活動協定による活動を支援するため、協定を締結した里山活動団体に対して、県の普及指導員、森林研究所職員等が活動地を訪問し、森林の整備方法等の必要な指導・助言を行います。

5 里山活動の広報の推進

県内で行われている里山活動を広く県民に紹介し、県が実施する講習会・行事等に関する情報及び里山活動団体間の情報の共有を図るため、インターネット及び「里山新聞」により情報の発信を行います。

6 調査及び研究の推進

間伐材や竹等里山の未利用資源を簡便に搬出するための方法、海岸防災林の広葉樹林化の方法、スギ・ヒノキの花粉量を減らすための管理技術等、里山を対象にした様々な研究に引き続き取り組みます。

また、里山の資源を今後の里山活動の発展につなげるべく、里山活動団体のニーズの把握に努めます。

VI 里山の保全、整備及び活用に関する施策を総合的かつ計画的に推進するために必要な事項

1 地域の合意形成と市町村との連携強化

里山は、過去から連綿と続く地域の人々の営みの中で形成されてきたものです。

また、里山の保全・整備に当たっては、市町村の積極的な関与の下、地域の合意形成が図られている必要があります。

このため県では市町村と連携を図り、市町村が行う施策を支援することにより地域に求められる里山活動団体を育成・支援し、地域での活動の拡大を図ります。

2 関係施策との調整・連携

平成25年度からは、林野庁において里山活動等を対象とする森林・山村多面的機能発揮対策交付金

事業が実施されることとなりました。このような事業を里山活動団体や中間支援組織が積極的に導入できるように、バックアップを図ります。

また、農村の自然環境や景観に関連する施策としては、耕作放棄地対策、中山間地等における農業生産の維持を通じた農村の多面的機能の確保への支援策、集落ぐるみで取り組む農地・農業用水の良好な保全と質的向上を図る活動への支援、野生鳥獣による農林業被害の防止対策が実施されています。これらの関係事業と里山整備を連携することにより、整備の効果的な推進を図ります。

《事 例》 いすみ市における地元団体による獣害防止セミナーの実施

いすみ市で谷津田の復元、生き物調査等に取り組む地元団体が、イノシシの獣害防除をテーマにセミナーを開催しました。

《事 例》 千葉県耕作放棄地活用応援団の結成

千葉県及び千葉県耕作放棄地対策協議会では、「千葉県耕作放棄地活用応援団」を組織し、地域からの要請により耕作放棄地の再生支援を行っています。

《事 例》 多面的機能支援交付金（※）による農村環境の保全

平成19年度から、「農地・水・環境保全向上対策交付金」が開始され、環境改善に共同で取り組む集落に対し、交付金が交付されるようになりました。農地周辺の水路、ため池の管理や畔の草刈り等の作業に、非農家やNPO、子供会等も参画するようになり、「田んぼの生き物調査」や「耕作放棄された谷津田の再利用」等も行われています。

（※）平成26年度から農地・水保全管理支払交付金は「多面的機能支援交付金」に変わります。

3 財政的措置

総合的な里山施策や、着実な里山整備を行うための施策を進めるため、財政的な措置を行います。

4 進行管理

社会情勢の変化や里山活動団体・森林所有者のニーズの多様化に対応した、柔軟かつ的確な里山施策を展開するため、里山活動の実施状況を把握し、施策に反映させていきます。

VIII 「ちば里山宣言 in 君津」の採択

小西由希子

時間が押していますが、君津の萩野実行委員から里山宣言を提案いたします。萩野さんどうぞ。

萩野 保

ただ今紹介いただきました、里山シンポジウムin君津実行委員会の萩野保です。朝の配布資料の素案をもとに、本日の討論をふまえた上で、新しく修正補強案を準備しました。

ただ今から「ちば里山宣言 in 君津」を提案申し上げます。提案は、ただ今お手元にま配布しました、宣言案の朗読をもってかえさせていただきます。

「ちば里山宣言 in 君津」案

—朗読（86 ページ参照）—

以上でございます。よろしくご審議のほど、お願い申し上げます。

小西

ただ今提案のありました宣言案について、ご意見がありましたら、お願いいたします。ご意見もないようでございます。それでは、ご承認の拍手をお願いいたします。（大きな拍手）

ありがとうございました。宣言は満場一致で採択されました。この里山宣言を本日のまとめとしてお持ち帰りいただき、明日からの活動に生かしていただきたいと思います。

充実した発言があり、台湾からの御参加もあり、多くの方の御参加で充実したシンポジウムができましたことをともに喜びたいと思います。また、おかげさまでこのような素晴らしい内容の発表・提言をいただき、「ちば里山宣言 in 君津」を決議し発信することができました。今日いただいたお声を皆様方のメッセージとしてホームページでも発信させていただきます。これからも引き続き里山を守るお一人おひとり、仲間として手を携えて行けたらと思います。

これをもって里山シンポジウム in 君津のすべてを終わりたいと思います。（大きな拍手）



台湾からの参加者を囲み実行委員を中心に参加者有志で記念撮影

Ⅸ「第 11 回里山シンポジウム in 君津」から 「きみつ里山活動ネットワーク」への進展

第 11 回里山シンポジウム実行委員会 in 君津 事務局長 尾形 孝和

第 11 回里山シンポジウム in 君津を準備してきた君津の実行委員会では、大会の半月後の 6 月 15 日（日）に事業実施報告会を開催しました。閉庁日でしたが市役所 6 階の会議室を使用させていただき、発表会に参加した君津の里山活動関係者、地域の里山シンポジウム実行委員と君津市役所の経済部長様をはじめ関係部局の方々の出席を得て有意義な会議となりました。

1. 報告会の次第（市役所 6F 16:00～17:30）

- 開会、あいさつ 里山シンポジウム in 君津実行委員会委員長 鈴木宗男
里山シンポジウム実行委員会代表 並木秀幸
君津市役所経済部長 中澤政義

○経過報告

- 事業実施報告 里山シンポジウム in 君津実行委員会事務局長 尾形孝和
- 会計報告 里山シンポジウム in 君津実行委員会委員 白井 博

○参加者意見交換（全員）

その後、「かずさリゾート鹿野山 山の上ホテル」に会場を移して、反省会と懇親会を行いました。市役所の会議では約 50 名の参加あり、その後の鹿野山山の上ホテルでの反省会は約 40 名の方に参加して頂き、さらにホテルに宿泊しながらの議論にも 20 名の方が参加して頂きました。この事業実施報告会と反省会の意見等は以下のようなものでした。

2. 参加者の感想

- ・このシンポジウムを開催して、君津市内で活動していた里山活動団体相互の連携が一層深まったと思います。
- ・今後も里山を維持発展させて行くために「命山」の視点を持ち、「きみつ里山宣言」を具体的な活動に発展させて行くことが良いと思います。
- ・「命山」というフレーズが君津から発信されたことは素晴らしいことだと思います。今後の君津の里山活動のキーワードにしていけたら良いと思います。
- ・「きみつ里山宣言」の精神は大切にして広く知らしめていくことが大切だと思います。
- ・その他にも多くの感想が寄せられていました。

3. 今後への期待

この里山シンポジウムのような里山活動の動きを継続発展していくことに対し特に否定的、批判的な意見はありませんでした。そこで、里山シンポジウム in 君津実行委員会では、今後の里山活動推進についてについて以下のような提案を致しました。

1) 里山シンポジウムでの出会いを大切に、とにかくみんなが手をつなごう

今回のシンポジウムを契機に、市内に多くの里山や地域づくりに関わる団体が多数あり、活動が活発に行われていることが認識され、互いに学び合うことができた。この経験を活かし、個々の活動を継続的に発展させるためにも、これらの活動団体が、互いの経験を持ち寄り、励ましあい、知恵を出し合い、全市的な活動を促進する必要性が高まった。

また、市行政各部局の支援と参加を得て、里山をキーワードとして活動団体と行政の協働への一歩が踏み出され、君津市が掲げる「人が集い 活力あふれる 健康都市 きみつ〜夢と誇りの持てるまち〜」実現をともに進める機運が醸成されつつあります。

2) 「里山宣言 in 君津」の精神を活かそう

- 里山（里山、裏山、命山）をきれいにし、賑わいを取り戻す活動の推進
- 地域をよりよくしたいとの思いを繋ぎ、地域おこし・地域づくり活動の推進
- 里山活動・地域おこし活動で人々の生きがいを広げよう

3) どんな団体や人が集まるか

里山や地域に関わる活動団体や個人、里山活動団体を支援しようとする団体個人
里山や地域に関心を持つ個人・団体、協賛企業・協賛団体等

4) 知る、見る、聞く、つながり広げる、を合言葉に

みんなで創ろう「里山ネットワーク」

(1) どんなことをするか

- ・ 交流と学び合い・・・互の活動の発表会や学習会、懇談会
- ・ 活動の提携・・・活動団体相互の提携
- ・ 活動団体と市民や都会の人たちとの架橋となる事業
- ・ 行政（市や県）との連携推進

(2) 名前や組織は

- ・ 「里山活動推進連絡会」等の緩やかなイメージ
- ・ 役員は、各地区から出していただく
- ・ 会は地区役員の合議体として運営することを基本

(3) 会費等は

- ・ 会費は通信費や事務用消耗品程度とし（一団体年 1000 円～2000 円程度）を考える（団体会員、個人会員等）
- ・ 事業によってその都度必要経費を参加費等として出し合う

(4) いつごろまでに

7 月いっぱいくらいまでに、今後の企画案をつくる。

4. そして、今

この平成 27 年 5 月 23 日（土）に昨年と同じ会場で、君津の里山活動団体の発表会と「きみつ里山活動ネットワーク」の設立総会を予定しています。

現在、昨年の里山シンポジウム in 君津の発表会のノウハウを生かして準備を進めています。

発表団体12団体、展示発表団体35団体、基調報告や討論会など、内容の濃い発表会になりそうです。

また、「きみつ里山活動ネットワーク」組織を正式の設立するための総会を計画しています。この全市的な組織の成立により、今後もシンポジウム形式の発表会や学習会などを進めていきたいと考えています。

きみつ里山活動ネットワーク設立の趣旨は以下のような内容を検討しています。

「里山活動ネットワーク設立の趣旨」

緑豊かな自然と良好な都市環境に恵まれた君津市で、市民誰もが健康で心豊かに過ごすためには、市民の暮らしの最も身近にある里山や里海とのかかわりやその活用が望まれます。

里山は、農地、樹林地、水源など多様な自然環境を有する地域であり、長年にわたる人と自然のかかわりを通じて維持・形成され、多種多様な生物の生息・生育環境としても重要な役割を果たす場所であり、人々の生活と深く結びついていた空間であるといえます。

そこで、先の平成26年5月18日の「第11回里山シンポジウム in 君津」を契機に、市内に多くの里山や地域づくりに関わる団体が多数あり、活動が活発に行われていることが認識され、互いに学び合うことができました。この経験を活かし、個々の活動を継続的に発展させるためにも、これらの活動団体が、互の経験を持ち寄り、励ましあい、知恵を出し合い、全市的な活動を促進する必要性が高まりました。加えて、当日会場の多くの参加者で確認された「ちば里山宣言 in 君津」の精神を生かしていく必要があります。また、市行政各部局の支援と参加を得て、里山をキーワードとして活動団体と行政の協働への一歩が踏み出され、君津市が掲げる「人が集い 活力あふれる 健康都市 きみつ 〜夢と誇りの持てるまち〜」実現をともに進める機運が醸成されつつあります。

私たちは、君津市の健康都市宣言を受け、里山の果たす役割とその有効活用、市民の社会参加への支援、及び学習、活動機会や活動場所の提供は、今後一層重要になっていくと考えています。加えて里山の持つ多くの機能やその利用について、指導できるリーダーの育成や資質・技能向上の学習機会の提供が求められます。そこで、広く同じ趣旨で活動する団体と連携を図り、君津市内の里山の保全、整備及び有効活用事業に関心を持つ個人及び団体と情報交換や連携を取りながら「人が集い 活力あふれる 健康都市 きみつ（里山に託す私たちの未来）」の普及・啓発活動事業を進めます。

この「きみつ里山活動ネットワーク」を軸に、益々里山の保全や持続的利用が進むことを願っています。



ちば里山宣言 in 君津

私たちは、「里山・裏山・命山 その恵みと創造—見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ、そして、作る、遊ぶ、学ぶ—」をテーマに第11回里山シンポジウム in 君津に集いました。

里山と地域にかかわり活動する私たちは

「里山の持つ魅力と人をはぐくむ底力」について語り合い

「里山に託す私たちの未来」を共有し、次のとおり宣言します。

里山は、先人が自然に働きかけ創り上げた

豊かな生活空間です

里山は、水・薪炭・萱・山菜・落ち葉・緑肥・木材など

多様な恵みをもたらす命山です

里山は、季節ごとに姿を変え、心をいやす

美しい景観、心のふるさとです

東京湾越しに富士を望む君津は

山と水に恵まれ、田園が広がる里山の象徴です

かつてトキとコウノトリが飛びかった君津

人と動物、植物が織りなす農・林・漁業を営む伝統の景色です

いま里山の多くが、人の手が遠ざかり

賑わいを忘れ、荒れ、寂しく、沈んでいます

私たちは今、里山の恵みの偉大さにきづき

再び里山に地域の誇りと命の賑わいを求めて行動をはじめました

私たちは、里山に親しみ、里山に抱かれ、里山にいやされ

里山文化に学び、里山に働きかけ、里山を守ります

私たちは、人と自然が一体となった

生物多様性の宝庫・里山の再生と再創造を進めます

そのために、私たち市民と市民グループは

国・県・市町村、企業・学校・公民館・博物館などと共に

広く海外の人々とも結び、知恵を出し合い、協働し

里山を子どもたちそして未来に生きる人たちに引き継ぎます

平成26年5月18日

第11回里山シンポジウム in 君津 参加者一同

編集後記

これまでの潜在的なパワーを結集した君津の「地元力」のおかげで、第11回里山シンポジウム in 君津 は435名もの参加者を得て、大成功のうちに終わりました。里山シンポジウム in 君津実行委員会委員長の鈴木宗男さんはじめ、実行委員会のみなさまのがんばりに心から敬意を表します。

君津の地元力の素晴らしいのは、シンポジウム開催がゴールではなく、これをスタートとして、さらに羽ばたいたところにあります。第11回里山シンポジウム in 君津 からちょうど1年後の2015年5月23日に「きみつ里山活動ネットワーク」が発足します。これから君津のみならず千葉の里山活動全体の牽引力となっていただけるものと、大いに期待するものです。

ちばの里山関係者にとってうれしいことがもう一つあります。2015年2月に「いすみ生物多様性戦略」が策定されたことです。この戦略の理念には「生物多様性豊かな地域づくり、里山里海を守り伝える人づくり」が掲げられました。これは、2011年にいすみ市で開催された第8回里山シンポジウム「里山里海と食」の大会がきっかけで、いすみ市民が動き出したものです。県内各地の里山シンポジウム開催で培われた「地元力」が、いすみ市のように次々と地域戦略という形で実を結んでいくことを願っております。

編集委員長 小倉久子 2015.4.30 船橋市市民活動サポートセンターにて

第11回里山シンポジウム in 君津 報告書

「里山・裏山・命山 その恵みと創造」 ～見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ、そして、作る、遊ぶ、学ぶ～

発行：里山シンポジウム実行委員会

発行日：2015年5月17日

編集委員長：小倉久子

編集委員：尾形孝和、栗原裕治、中村俊彦、桑波田和子

写真提供：田中正彦、尾形孝和

連絡先：里山シンポジウム実行委員会代表 並木秀幸

E-mail: namiki.hideyuki@gmail.com

里山シンポジウム実行委員会 公式 HP <http://www.satochiba2.jp>

